

ツルゲーネフの世界
はつ恋

はじめに

さて、今回のツルゲーネフの有名な『はつ恋』という作品は、もう世界的にも広く知られている名作の一つとされているものですが、それは、十六歳の時に、作者（ツルゲーネフ）自身が実際に経験した「はつ恋」をもとにして書かれたものであり、もちろん、「小説」（作品）である以上は、「事実」そのものである筈もなく、いろいろな脚色がなされているかと思うが、ただ、作者の「経験」を踏まえている事は重要であり、そこには確かな「手応えと実感」とが伴うものになるからである。（そして、今回は、その『はつ恋』という作品の「概要と解説と評論」になっっているものです。）

それでは、その内容であるが、当時、主人公は十六歳であり、モスクワの両親のもとに住んでいたが、その両親の借り入れた別荘が、カールガ関門のほとり、ネスクーチヌイ公園の前にあったので、そこに五月九日、家族で移ることになった。それから三週間後には、今度は、隣りの空き家の離家に「公爵夫人とその令嬢」が引っ越して来たのであった。主人公は、その令嬢（ジナイダ）を一目見た時から、まさに「一目惚れ」に深く落ち入ってしまった、何とか知り合いになりたいと思うところに、母親の使いで隣りの離家に行く機会を得て、隣りの離家の「公爵夫人とその令嬢」と知り合いになり、ますます令嬢（ジナイダ）に心惹かれて行くのであった。

ある時、「……今夜、八時に家にいらつしやいな」と誘われて、正装で行ってみると、令嬢の居間では、医師のルーシンを初め、詩人のマイダーノフ、伯爵のマレーフスキ、軽騎兵のベロヴゾーロフ、そして、予備大尉ニルマーツキイなどの常連の五人が集まっては、夜ごと、令嬢を中心とした賭け遊びなどが行なわれ、勝った人は令嬢の手に接吻が出来るというものであり、主人公も加わって、楽しく過ごすようになるのである。

そのような日々が続くなかで、やがて、令嬢（ジナイダ）は深く悩み苦しむような姿を見せるようになり、主人公はどうしたのかと深く心を痛めるのであるが、それが「恋に悩み苦しむもの」であることを知ると、「……相手は誰か？」とあれこれ空想を巡らすようになるという内容であり、興味や関心がありましたら、ぜひとも訪ねて見てください。

令和四年十一月吉日（完成版）

如月翔悟

目次

「はつ恋」

はじめに

- 序、冒頭部分（初恋談義の提案）
- 一、十六の時モスクワ国立公園前の別荘で
- 二、お嬢さんとの衝撃的な出逢い
- 三、隣りの公爵夫人からの手紙
- 四、隣りの家を訪問しお嬢さんと会話する
- 五、隣りの公爵夫人が母を訪ねて来る
- 六、公爵夫人とお嬢さんが夕食にやっつて来る
- 七、お嬢さんと五人の常連の人たち
- 八、父の性格と父と主人公との関係
- 九、令嬢の性格と常連たちとの関係
- 十、令嬢の恋の相手は誰かと思悩む
- 十一、令嬢が一つの「劇詩」をつくる
- 十二、ジナイーダの変容ぶりに驚く
- 十三、ジナイーダはおとなしい馬を欲しが
- 十四、父とジナイーダの乗馬姿を見かける
- 十五、久しぶりにジナイーダと会話する
- 十六、令嬢の若い女王主催の舞踏会の話
- 十七、夜中、庭である男の姿を見かける
- 十八、ジナイーダとその実の弟と遊ぶ
- 十九、夫の不倫発覚で夫婦喧嘩が生じる
- 二十、引越してジナイーダとの最後の会話
- 二一、父親と一緒に乗馬で遠乗りをする
- 二二、令嬢ジナイーダのその後とその死

※ 参考文献

はつ恋

はつ恋

序・冒頭部分（初恋談義の提案）

さて、客はもうとうに散ってしまった。時計が十二時半を打った。部屋の中に残ったのは、主人と、セルゲイ・ニコライイチと、ヴラジミール・ペトローヴィチだけである。主人は呼鈴よびりんを鳴らして、夜食の残りを下げるように命じた。そして、「……じゃ、そう決りましたね」と、主人は肘掛椅子ひじかかけいすにふかぶかと身を沈めて、葉巻はまきに火を付けながら、こう言い出した。「……めいめい自分の初恋物語をするのですよ。さあ、まずあなたの番です、セルゲイ・ニコライイチ」——この人は、眉まゆも睫まつげも白っぽい、ふっくらした顔だちの、まるまるとした男であった……。

*

まず最初に、問題になるのは、所謂「はつ恋」の定義をどうするのか？ 当然、作者（ツルゲーネフ）もそのことを十分に考慮に入れて文章が組み立てられて行くのである。そこで、冒頭部分では、まず最初のセルゲイ・ニコライイチという人物が登場して、「……僕には初恋というものがありませんでしたよ」と言い、「……僕が最初にして最後の恋をしたのは、六つの頃ころで、相手は自分の乳母うぼでした」と告白している。これらは、一体、何を意味しているのかと問えば、それは、幼児期（或いは小学低学年頃）に或る異性に思いを寄せるのも立派な「恋」ではあるが、しかし、それをいわゆる「はつ恋」と呼ぶにはまだ幼過ぎるという作者の定義になるのである。

次に、私は、「……いきなり第二の恋から始めたんです」と言っている。当然、第一の恋は「はつ恋」であるが、それでは、なぜその恋を「はつ恋」と呼ばないのか？ それには、次のような理由があるからである。つまり、「……僕は十八の年に初めて、一人のごく可愛らしいお嬢さんのあとを追いました。ところが、その追いまわし方というのが、まるでそんなことなんか珍しくもないといった風だったのです。ちょうど、その後いろいろな女の尻しりを追い回しましたが、それとちつとも変わったところがなかったのですよ」と言うのである。つまり、大事なはその「追いまわし方」であり、「……まるでそんなことなんか珍しくもないといった風だった」とは、すなわち、「心の底からの相手への純粹な一途な恋心というものではなく、むしろ「女の尻しりを追い回す」（それは「性的欲求」）にかられての行動になっていたので、それを「はつ恋」とは呼びたくないという作者なりの定義になっているのである。

次は、主人の話であるが、「……わたしの初恋にしたところで、大して興味をそそるようなものはないですよ。わたしは、現在の妻と知り合いになるまで、誰一人恋した覚えはないんです。しかもわれわれのことは、万事すらすらと運んだのです。それぞれ父親から縁談を持ち出されると、われわれは見る見るお互おたが同士好きになって、一足跳とくびに結婚してしまつたというわけで、わたしの話は、ほんの二言ふたことで済んでしまいますよ」と言うのである、それは、いわば親たちが「お膳立なつかて」した中での「恋」（初恋）であり、いわゆる「……ある日、ある時、ある場所で、突然、ばつたりと出逢であつた相手（異性）に、まさに『一目惚めくれ』に深く陥おとるような劇的なものではなかった」ということである。

最後に、中年となつた主人公（ウラジミール・ペトローヴィチ）という人の登場となり、

「……わたしの初恋はまったく世間並みのものじゃありません」と言うと、「ほう！」と、主人もセルゲイ・ニコラーイッチも声を揃えて、「……それなら、なおさら結構、話して下さい」と言うので、「……お安い御用ですが、困りましたな。話すのはよしでしょう。わたしは話が下手なほうですから、無味乾燥なあつけない話になるか、それともだらしない調子外れな話になるか、そのどっちかです。もしよろしかったら、思い浮かぶだけのことをすっかり手帳に書いて、読んでお聞かせしようじゃありませんか」と言うのである。それは、一体、なぜなのかと問えば、それは、所謂「対話形式」のように語るよりは、むしろ一つの纏まった「物語」（作品）とした方がよいということであり、そして、彼の「はつ恋」というのは、「……ある日、ある時、ある場所で、突然、ばつたりと出逢った相手（異性）に、まさに『一目惚れ』に深く陥るような劇的なものであったと同時に、心の底からの相手への純粹な一途な恋心とを兼ね合わせたものであった」ということであり、それがこれから本文の中で語られて行くということである。

一、十六の時モスクワの国立公園の前の別荘で……

さて、この有名な『はつ恋』という作品は、作者（ツルゲーネフ）自身の「自伝的要素」が強いとされ、それゆえ、その「文章」（内容）もその当時の頃を思い出しながら書いているという感じを受けるものである。

例えば、「……その頃、わたしは十六歳であり、一八三三年の夏のことでした。わたしはモスクワの、両親のもとに住んでいたが、彼らの借り入れた別荘が、カルーガ閩門のほとり、ネスクーチヌイ公園の前にあった」のである。——わたしは大学の入学準備をしていたが、勉強といっても碌にせず、ゆっくり構えていました。それは、誰一人わたしの自由を束縛するものはなかったからであり、わたしはしたい放題に振舞っていたが、とりわけ最後の家庭教師と別れてからはなおさらそうであった。

一方、実際の「両親」であるが、まず、「母親」（ヴァルヴァーラ）という女性は、醜い容貌とひねくれた性格を持っていたらしく、早くから父を失い、それゆえ、幼い頃は血縁関係のない義父からも（十四歳からは）気の短い伯父からも（合計二十年間）冷たい仕打ちを受け続けていたらしい。ところが、彼女が三十四歳の時に、大金持ち（の千人からの農奴を有する領主）の伯父が急死して、伯父の遺産がそっくり彼女のものになったのである。突然、県内で指折りの資産家となったヴァルヴァーラには、実に多くの結婚相手の候補者がいた中から、六歳年下でハンサムなセルゲイと結婚したのである。その「父親」（セルゲイ）という人の家柄は、古くから歴史にも名をとどめていた名門であったが、その当時は落魄して、わずか百三十人の農奴を有する地主であり、冷たい性格で女好き。一方、母親のヴァルヴァーラは、すぐに叱りつけるヒステリックでわがままな女性。家庭内でのいざこざが絶えなかったと言われている。幼いツルゲーネフは、孤独に耐えながら森や野原の中で夢想に耽って、憂鬱で悲しい日々を過ごしたとある。

一方、両親についての「本文」は、次のようになっていて、つまり、「……父のわたしに対する態度は、優しかったけれど、たいして気のない優しきだった。（これは、子供よりも女性関係の方が遙かに忙しかったからである）。また、母はほかに子供がいなかったにもかかわらず、わたしにほとんど目もくれなかった。ほかの心配（夫の浮気）に心を奪

わかれていたからである。わたしの父はまだ若くて、なかなかの美男子であったが、勘定ずく（金目当て）で母と結婚したとされている。（それゆえ、妻の「夫への愛情」は強くあつたとしても、夫の「妻への愛情」はそれほどはなかったことになる）。母は父よりも十歳（実際は六歳）も年上であった。母親は、絶えず興奮したり、嫉妬したり、腹を立てたりして、悲しい生活をしていた。——しかし父の前ではそうしたそぶりを見せなかった。母はひどく父を恐れていたし、父は父で厳しい、冷たい、よそよそしい態度を取っていた。……わたしは、あれほど上品にとりすまして、自ら頼むことの深い、自分の権力を絶対に信じ切っている人を、今だかつて見たことがない」となるのである。

次は、「……その別荘で過した最初の二、三週間のことを、わたしはいつまでも忘れないうだろう。われわれが町から引越したのは、五月九日であり、わたしの散歩は——時には別荘の庭の中、時にはネスクーチヌイ公園、時にはまた関門の外まで足を伸ばすといった風で、いつも何か本を一冊持つて出たが、それを開いて見ることは稀であり、大抵は声高々と詩を朗吟した。血潮は身内に湧き立ちて、胸はやるせない気持ちで一杯だったが、今、思い出しても、それは何とも甘たらく、滑稽なほどであった。わたしは絶えず何物かを心待ちにし、絶えず何物かにびくびくし、見るもの聞くものに心を躍らせながら、全身これ待機の姿勢にあつたのである。——これは、「思春期」を過ぎすすべての若者たちに「共通した心理」であり、それは、つまり、「……第二次性徴とともに、自我のはつきりとした目覚めによつて、この世の実に様々なものへの好奇心が一気に拡大し、また、異性への興味や関心なども急激に高まる時期に当たっているのである。」

それを本文で見ると、今までは「……女の姿とか、女の愛の幻影とかいうものは、その当時は、ほとんど一度もはつきりとした輪郭を帯びて心に浮かんで来なかった」が、それは、親しい女友達や恋人などはいなかったからであり、しかし、「……わたしの考えたすべてのもの、わたしの感じたすべてのものには、何かしら新しいもの、言葉に尽くせないほど甘美な、女性的なものを思う、そのような予感が潜んでいて、——この予感、この期待は、やがて間もなく実現されるべき運命にあつた」のである。

*

*

わたしたちの別荘というのは、コロネード 円柱列のついた木造の地主屋敷と、二軒の低い離家から成り立っていた。左側の離家は、安ものの壁紙を造る小さな工場になっていて、一方、右側の離家は空いていて、貸家になっていたが、ある日——五月九日から三週間ばかり経つた日——この離家の窓の鏝戸が開かれて、中から二人の女の顔がのぞいた。——どこかの家族が越して来たのである。それは、公爵夫人ザセーキナとその娘のジナイーダであったが、公爵夫人と聞くと、母は初めいくらか敬意を響かせて、「……まあ、公爵夫人……」と言つたが、やがてまた付け足した。「……きつとどこかの貧乏貴族だろうよ」と。まったく公爵夫人ザセーキナは、裕福な婦人でありようはずがなかった。彼女の借りた離家は、いかにも古びて手狭で、おまけに天井の低い家なので、幾らかでも小金を持った連中なら、とても住む気にはならないからである。

それでは、なぜここに「引越し」て来たのか？ それは「全くの偶然」からであったのか？ それとも父親が「呼び寄せたのか？」、そのどちらかだと思ふが、もう一つ、この時点で、父親とジナイーダとの関係は、「……すでにあつたのか、それともなかったのか？」という、これも大きな問題になるかと思ふ。（恐らく、父親が呼び寄せ、関係はす

でにあったと見るのが、自然であり、その一つの大きな証拠となるものが、引越してすぐにも主人公の母親に手紙を出し、母親に保護を願い出ている。もし「全くの偶然」で引越して来たならば、隣りに誰が住んでいるかなど分かりようもないし、ましてや手紙を出して、(知りもしない) 母親に「保護を願い出る」などありようがないのである。恐らく、父親が「……裕福な地主の妻に頼めば、何とかしてくれるかも知れないと話したに違いない、それは、父親とジナイーダとの関係はすでにあり」、それゆえ、家庭のひっ迫した「事情」などもよく知っていたということである。)

二、お嬢さんとの衝撃的な出逢い

わたしは毎日、夕方になると、鉄砲を持って庭をぶらつきながら、鴉をねらう習慣があった。——わたしは庭へ出て行って、並木道という並木道をむなく歩き回ったあげく、ふと低い垣根に近づいた。それは、右手の離家の向こう側に延びて、わたしたちの領分を区切っているものであった。わたしは首をたれながら歩いていると、突然、人の話し声が耳に入った。わたしはひよいと垣根越しに一目見ると、——思わず化石したようになってしまった。……異様な光景がわたしの目に映ったのである。

まず、この場面で、まだ十六歳の主人公が衝撃的な驚きを覚えたのは、次の「二つ」の事であり、その一つは、「……青々した木苺の茂みに囲まれた草原の上に、縞の入った薔薇色の着物をきて、白い布を頭にかぶった、背の高いすらりとした少女が立っており、周りには四人の青年が近々と寄り添っていた。少女は小さな灰色の花で、順々に彼らの額を叩いてゆく。わたしはこの花の名前を忘れたけれど、子供らになじみの深いものである。それは小さな袋のような恰好をしていて、何か堅いものにぶつつけると、大きな音を立ててはじけるのであり、青年たちは喜んで額をさし出していた」という、この「情景」であるが、これは、一人の「女性」(少女)に四人の「青年」が言われるがまま「喜んで従順に傳えている姿」である。

そして、もう一つは、「……その少女の身振りには、実に何とも言えぬ魅力に富んだ、命令するような、同時になでつくしむような、人をばかにしたような、しかも愛くるしいところがあるので、わたしはほとんど驚きと嬉しさのために、あやうく声を立てんばかりになって、自分もあの美しい指で叩いてもらいたい、そのためには、すぐにその場で、世界じゅうのものを何もかも投げ出したってかまわない、というような気持がした。わたしは何もかも忘れ果てて、そのすらりとした姿や、細い首や、美しい手や、白い布の下からのぞくやや乱れた白っぽい髪や、なかば閉ざされた賢そうな目や、睫や、その下につづく優しい頬……こういうものをむさぼるように見つめていた」とあり、これは、まさに『一目惚れ』である。その『一目惚れ』の定義は、——ある日、ある時、ある場所で、まったく思いがけないような感じであつたりとめぐり逢った相手を見た時に、その人は、その一瞬、「アッ!」という感じの衝撃を受けると同時に、今までの「動きを奪われ」て、しばらく動けなくなるといふものである。それは、なぜかと言えば、それは、その人の「心の中」では相手の異性に対して、「あつ、きれいだな!」とか、「あつ、カッコいいなあ!」というような思いに襲われて一杯になっているために、しばらく「動き」を奪われてしまふものなのである。

すると、「……君、君」と、突然、誰かの声がそばでこう言った。「……一体よそのお嬢さんを、そんな風に見てもいいもんですかね？」と言うので、わたしは全身をびくりとさせて、麻痺したようになった。……すぐそばの垣根の向こうに、黒い髪を短く刈り込んだ、どこかの男が立っていて、皮肉な目つきでわたしを眺めていた。——この人は、医師の「ルーシン」という人物であり、一方の少女も、わたしの方へ振り向き、お互いの目と目がふれ合うと笑い出し、その笑い声に追われながら、自分の部屋へと逃げ込んで、ベッドの上へ身を投げ出したが、わたしはかつて身に覚えのないほどの興奮を感じた。

ひと休みすると、わたしは髪をなでつけ服を払って、お茶を飲みを下へおりた。若い娘の面影は、目の前にちらついて、動悸はもう落着いていたけれど、胸は妙に快く締めつけられるようだった。「……お前、どうしたのだ？」と、不意に父が聞いた。「……鴉が撃てたのかい？」と聞くので、わたしはすっかり父に話してしまおうかと思つたけれど、じつと堪えて、ただにっこり笑っただけだった。寝支度をしながら、自分でもなぜかわからず、二度ばかり一本足できりきりつとまわつた。それからポマードをつけて床へ這入ると、まるで死人のように朝までぐっすり眠つた。夜明け前にちよつと目を覚ましたが、有頂天の目つきであたりを見まわした後——また寝入ってしまった。

三、隣りの公爵夫人からの手紙

さて、翌朝は、「……何とかして、あの家（の人たち）と知り合いになりたいものだな？」と、わたしが目をさますが早いかな、まずわたしの頭に浮んだのは、こういう考えであった」とある。それでは、それは一体どのようなにして実現したのかというと、それは、まさに次のような事からである……。

まず、お茶を飲んだあとで、わたしは別荘の前の通りを何度か行ったり来たりして——遠くの方から窓の中をのぞいてみた。……すると、カーテンの陰に、彼女の顔が見えたような気がしたので、わたしはびっくりして、そこそこにその場を立ち去つた。「……だが、どうしても知り合いにならなくちゃ」と、わたしは、ネスクーチヌイ公園の前に拡がっている砂原を、あてもなく歩き回りながら考えた。「……しかし、どうしたらよいのか？そこが問題だ」が、わたしはきのうの邂逅の顛末を、細かな端々まで思い浮かべるのであった。どういふわけか、彼女がわたしに笑いを浴びせた時のことが、ことさらはつきりと思ひ出される。しかし、わたしがしきりに胸を躍らせながら、さまざまな計画を立てているうちに、運命はちゃんとお膳立てをしてくれたのである。

わたしの留守の間に、母は新しい隣人から手紙を受け取っていた。それは灰色の紙に書いてあって、その手紙は、いかにも無学らしい文体と、だらしない筆蹟でしたためてあったが、その手紙を持って、公爵夫人は母に保護を願ひ出たのである。つまり、わたしの母は、公爵夫人の言葉によると、彼女とその子供の運命を掌中に握っている二、三の名士と、昵懇の間柄だとのことであつた。彼女は重大な訴訟事件を起こしていたのである。

「……率爾ながら（突然のことながら）わたしごと」と、書いてあり、終りに彼女は母に向かつて、訪問をお許し願ひたいと申し出ていた。わたしが外から帰ってみると、母は御機嫌斜めのていだった。父が不在なので、誰と相談しようにも相手がなかったのだ。いやしくも「叔女」であり、おまけに公爵夫人ともあろう人に、返事をしないわけにはゆか

ず、ではどう返事をするかという段になると、返事をフランス語で書くか？ それともあまり得意でないロシア語で書くかと思ひ迷っていたところに、ちょうど主人公が帰って来たということである。

母はわたしの帰りを喜んで、すぐさま公爵夫人のもとへおもむき、わたしの母は力の及ぶ限りいつ何時でも奥様のお役に立ちたいと思っているということを、口頭で述べた上、午後一時頃おいでになるのをお待ちしていると伝えるように言いつけた。自分のひそかな心願（心の中で願っていた事）がかくも思いがけなく、急に満たされたということは、私を喜ばしめずれば、また驚かせました。そこで、新しいネクタイとフロックコートを着ることにした。それはロシアの「正装」であり、家にいる時は、まだ折襟のジャケットを着ていたのである。——自分では（ネクタイにフロックコート姿が）いやでいやでたまらなかつたのであるが、お嬢さんに逢えると思えば、そんなことは何でもないのである。

四、隣りの家を訪問しお嬢さんと会話する

さて、次は、隣りの離家の家の中の様子が詳しく描かれていると同時に、そこに住む公爵夫人（ザセーキナ）とその娘（ジナイーダ）そこに仕える老僕（ヴォニファーチイ）などの人物の特徴や容姿容貌などが実に事細かに描かれている場面であり、本文では、次のようになっているかと思う。まず、「……わたしが無意識に体じゅうを震わせながら、狭苦しい薄ぎたない離家の控え室へ入って行くと、くすんだ銅色の顔に、豚のような小さい気むずしそうな目をした白髪頭の老僕が、わたしを出迎えた。額から顚顚へかけて、わたしなど生まれてこのかた見たこともないような、深い皺を刻んだ老人であった。

彼はひきちぎった声で、「……なんの御用ですね？」と訊ねるので、「……ザセーキナ公爵夫人はお宅でしょうか？」と聞くと、「……ヴォニファーチイ！」と、ひびの入ったような女の声が、奥の間から聞こえて来た。やがて、奥では、「……え？……誰か来たって？」と言う声が聞こえて、「……隣りの坊っちゃんだって？　じゃ、お通し」と言うので、「……どうぞ客間へお通りくださいまし」と、老僕は言い、わたしは身づくろいをして、奥の「客間」へと入って行った。

さて、入って見ると、そこはあまりきれいとは言えない小部屋であり、椅子やテーブルなどもまるで大急ぎで並べたような、貧乏臭いものであった。窓ぎわの、一方の肘かけの折れた安楽椅子には、古い緑色の着物をきて、色の交じった毛糸の肩掛けを首のまわりに巻いた、年の頃は五十ばかりの、素頭の醜い夫人がすわっていた。彼女の小さな黒い目は、いきなり無遠慮にわたしの顔へ吸いついた。

わたしはそのそばへ近寄って会釈をして、「……失礼ですが、ザセーキナ公爵夫人でいらつしやいますか？」と聞くと、「……ええ、わたしがザセーキナ公爵夫人です。あなたはVさんの御息でいらつしやいますか？」と訊くので、「……ええ、そうです。わたしは母の用事でお宅へ上がったのです」と言い、わたしはザセーキナ公爵夫人に、彼女の書面に対する母の返事を伝えた。わたしが口上を終わつた時、彼女はもう一度わたしに目を注いで、「……どうもありがとう、ぜひお伺いしましょう」と、やがて彼女は言った。

「……でも、あなたは本当にお若くていらつしやいますね！　おいくつですの？」と聞くので、「……十六です」とわたしは、思わず口ごもりながら答えた。

公爵夫人は、ポケットを探つて、何かいっぱい書き込んだ書類を取り出して、それを鼻のすぐそばへ持って行きながら、その検分にかかった。「……結構な年頃なこと」と、彼女は、椅子の上であちこちからだをねじ向けたり、もぞもぞ身動きしたりしながら、彼女は不意にこう言うのであった。「……どうぞあなた、ご遠慮なく、宅ではぎつくばらんですからね」と言うが、「……どうもぎつくばらん過ぎる」と、思わず嫌悪の念が湧き出るのを感じながら、彼女の不格好な姿を隈なく見まわし、わたしは一心に思った。

その瞬間、客間の別の扉がいきなりぱつと開いて、きのう庭で見かけた娘が敷居の上に姿を現わした。彼女は片手を上げたが、その顔にはちらりと薄笑いが浮かんでいた。「……これはわたしの娘でございます」と、公爵夫人は、肘で娘をさして言った。「……ジーノチカ、この方はお隣のVさんの御息だよ。失礼ですが、あなたのお名前は？」と聞くので、「……ヴラジミールです」と、わたしは席を立て、興奮のあまり声をかすらせながら、返事をした。「……で御父称は？」と聞くので、「……ペトローヴィチです」と答えるのであった。

娘は相変らず薄笑いを浮かべたまま、かすかに目を細めて、首を少し横にかしげながら、いつまでもわたしを見つめていた。(これは恐らく、ああ、この子が父親の息子さんなんだわという感じで見ていたに違いない)。「……あたし、もうヴォルデマル(ヴラジミールのフランスふうの呼び方)さんには会ったわ」と、彼女は口をきった。(彼女の銀の鈴のような声の響きは、何か甘美な冷たい感じとなつて、わたしの背筋を走った)。「……ねえ、あなたをそう呼んでもいいでしょう？」と言われ、「……ええ、そりやもう」と、わたしはしどろもどろに答えた。「……どこで一体？」と、公爵夫人が尋ねたが、公爵令嬢は、それには答えず、「……あなた今、お忙しくつて？」と、わたしから目を離さずに言った。「……いいえ、ちつとも」と言うと、「……じゃ、毛糸を巻くお手伝いをして下さらないこと？ こっちへいらつしやいな、あたしの部屋へ」と、彼女は一つ肯いて見せて、ずんずん客間を出て行った。わたしはそのあとからついて行った。

一、お嬢さんの部屋で話をする

まず、彼女は、なぜ十六歳の主人公を「自分の部屋」へと入れたのだろうか？ それはもちろん、「……毛糸を巻くお手伝いをして下さらない？」ということであつたが、それに加えて、もう一つの理由は、やはり「父親の息子さん」をもつと「よく知りたい」という欲求もあつたのではないかと思う。そして、その結果として、十六歳の主人公も彼女(ジナイーダ)のことをいろいろ詳しく知ることになるが、当時、まだ十六歳の主人公の初々しい「心の状態」(心模様)が作者の「頭の中」(或いは「心の中」)に自然と想い出されて来て、それを文章で再現していることになるかと思う。そして、ここで大事な文章としては、彼女自身が言った言葉であり、それは、次のようなものである。

「……ねえ、ヴォルデマルさん、昨日あたしのこと、どうお思ひになつて？」「……きつと悪い女だと思ひになつたでしょう」とあるが、これは「……自分がどのようになつてお思ひになるのか少し気になつた」ということになるのだろう。

次に、「……実はね」と、彼女は言い返した。「……あなたはまだ、あたしを御存じないけれど、あたしそりや不思議な女なのよ。いつも本当のことを言ってもらいたい。あ

あなたは十六だそうですね、あたしは二十一なんですものね。あたしの方が年上でしょう、だからあなたは、あたしにいつも本当のことを言わなけりやならないわ。そして、あたしの言うことを聞かなくちゃ」と、彼女は言い足して、「……あたしの顔をごらんさない、なぜ見ないの?」「……わたし自分の顔を見られてもいやじゃないわ……わたしあなたの顔が気に入ったの。わたし今に二人が仲よしになりそうな気がするわ。ところで、あなたわたしが気に入って?」とずるそうな調子でつけ足した。

そこで、「お嬢さん……」と、わたしは言いかけると、「……まず第一に、これからわたしをジナイダー・アレクサンドロヴナと呼んでちょうだい。第二に——子供のくせに(子供と見ている)——(と言って、彼女は言い直した)——若い男のくせに——自分の感じたことをまっすぐに言わないなんて、なんて意気地のない話でしょう。そんなことは大人のすることよ。ね、あなた、わたしが気に入ったでしょう?」となっていくが、これは、完全に「主導権を彼女に奪われている状態」になっているのである。

二、お嬢さんを仔細に観察する

彼女がしばらく目を上げないのいいことにして、わたしは彼女を仔細に観察を始めた。それも初めは盗み見だったものが、やがてだんだん大胆になって行った。彼女の顔は、昨日よりさらに美しく思われた。何から何まで繊細で、聡明らしく、可憐な感じに満ちていた。彼女は、白い巻上げカーテンを下ろした窓に、背を向けて坐っていた。日の光はそのカーテンを通して射し込みながら、柔らかな光を、彼女のふさふさした金髪や、いかにも無垢らしい首筋や、すっとしたなで肩や、優しい静かな胸のあたりに、柔らかい明かりを注いでいた。——わたしはじつと彼女を眺めているうちに、彼女はわたしにとって限りなく貴い、限りなく近いものになって来た。わたしはもうずっと前から彼女を知っていて、彼女と知り合いになるまでは、何一つ知りもしなければ、まるで生活もしなかったような気がした。……彼女はもうだいたいぶ着古した地味な服を着て、エプロンを掛けていた。わたしはその着物やエプロンのひだを、喜んで一つ一つ撫でたいような気持がした。わたしは敬虔の念を抱きながら、彼女の靴に額をつけたいとさえ思った。「……いま自分はこうして、彼女の前にすわっている」と、わたしは考えると同時に、「……わたしは彼女と近づきになった……ああ、何という幸福だろう!」と、わたしは歓喜の余りに危うく椅子から飛び降りそうになったが、それは、丁度美味いものを食べている小さな子供みたいに、足を少しばたばたさせたばかりですました。(つまり主人公は、ジナイダーの「魅力」に限りなく心惹かれて、どこまでも深く嵌まって行く心理的状态になっているのである。)

三、一人の軽騎兵が小猫を持って来る

さて、突然、「小猫」が登場することになるが、これは恐らく、いつもの常連が集まった時に、彼女(ジナイダー)がこれこれこういう「小猫が欲しい」というような話をしたことがあり、その話を軽騎兵のペロヴゾーロフという人物は、そのまま素直に受け止めて、わざわざ「小猫」を見つめ出して連れて来たということになるかと思うが、それはもちろん、彼女(ジナイダー)の手に「接吻」が出来るという褒美があるからである。一方、彼

女（ジナイード）は、その「小猫」をどのくらい欲しいと思っていたかはよく分からないが、ただ「本文」のなかで、最初のうちは非常に興味を示していたが、「……子猫はお腹がいっぱいになると、気取った様子で前足を踏み変えながら、喉を鳴らし始めた。ジナイードは立ち上がり、小間使いの方へ振り向くと、無造作に、「……あつちへ持つてお行き」と言うのであった。——だとすれば、彼女にとつてこの「小猫」は何がなんでも欲しいという程ではなかったかも知れない。これに対して、作品の終盤頃に出て来る「おとなしい馬」を欲しがるという場面が出て来るが、これは、まさに「……何がなんでも欲しいという心の底からの欲求」になっていたということである。

さて、主人公は、家の下男のフォードルから、「……あなた様を呼んで来いと、お母様がおおせになりましたので」という言葉を受けて、やがて「自分の家」へと帰ることになるが、ただ、ここで面白いと思うのは、「……なぜ、あの人は笑ってばかりいるんだろう？」という言葉であり、これは、男の子であれば、誰もが経験することであるが、「……なぜ女の子はあかも頻繁に（話しながらも）笑っているのだろうか？」ということであり、この問題は、女性に直接聞くのが一番よい方法かと思うが、恐らく、いろいろな意味合いがあり、例えば、笑っていたほうがその場や物事などが円滑に進むようなこともあれば、また、実際に見聞きしたものが面白くおかしいということから生じる本来の笑いもあれば、また、何か劣ったようなものを見聞きして笑う優越的なものやその他、いろいろとあるかと思うが、作品の中の「……なぜ、あの人は笑ってばかりいるんだろう？」という場合は、主人公を「……好意的に見ているという笑い」であり、決して「主人公を見下げている」というような笑いではない」のである。

五、隣りの公爵夫人が母を訪ねて来る

さて、この章では、「……隣りの公爵夫人が約束通り母を訪ねて来たが、母親の気に入らなかった。わたしは二人の会見の場には居合わさなかった」とある。これは恐らく、事実その通りであったのだろう。十六歳の子供がその場に居合わせることもの方が遙かにおかしい。そして、夕食の時に母が父に話したところによると、このザセーキナという公爵夫人は、（公爵夫人でありながら）どうも極めて「俗っぽい女」に見えたとのことであり、彼女は、「……セルギイ公爵にとりなしてくれ」と、うるさく母に頼み込んだらしく、彼女は始終何かの訴訟や後ろ暗い事件——卑しい金銭問題などに関係していたのであり、てつきりとんでもない食わせ者に違いない、と言った散々の評判だったのである。

それでいながら、母親は公爵夫人を娘と一緒に、あす食事に招待した（この「娘さんと一緒」という言葉を聞くと、わたしは皿の中へ鼻を突っ込まんばかりにした）。とにかく、あの夫人は隣り同士であり、名のある人でもあるから、というのが理由であったとある。この「……わたしは皿の中へ鼻を突っ込まんばかりにした」とあるが、これは恐らく、「娘さんと一緒」という言葉を聞いて、強い「驚きや興味や喜びなど」を示したということになるのだろう。

一方、父はそれに対して、その夫人が何ものか、今やつと思ひ出したと言った。彼は若い時分、亡くなったザセーキ公爵を知っていた。それは立派な教育を受けていたけれど、頭の空っぽなやくざ者で、パリに長く暮らしていたために、社交界ではパリジャンと呼ば

れていた。非常に金持ちだったがカルタで全財産をすってしまい、何のためか分からないが、恐らく、金のためであろう、どこかの小役人の娘と結婚した。結婚後、投機に手を出して、今度は完全に破産してしまったとある。

つまり、主人公の「父親」という人は、突然、隣りに引越して来た「家族」のことについて、実に「よく熟知していた」ということになる。これは全くの「偶然」なのか？それともむしろ「父親が離家はなれにその家族を呼び寄せたのか？」、そのどちらかだと思いが、恐らく、後者であり、それは、「……父親とお嬢さんとの関係はすでにあり、その家庭の逼迫ひっぱくした状況もよく知っていた」ので、父親は、「……裕福で地主の妻に頼めば、何とかしてくれるかも知れないと考えたのではないかと思う」。

それを聞いて、「……どうぞあの夫人がお金を貸してくれなどと言ひ出さなかりやいいが」と、母は言った。「……それも大いにあり得ることだね」と、父は平然として言い、「……あの奥さん、フランス語を話すかね？」と聞くので、「……そりゃひどいんですよ」と答える。「……ふん。まあ、そんなことはどうでもいい。君は今、あの人の娘さんも招待したと言ったね。誰かが言っていたかと思うが、とてもきれいな教育のある娘だそうじゃないか」（百も承知のことをいかにも知らないように）言うのと、「……へえ！ してみると、お母さんに似なかつたわけですね」と言うので、「……それから、父親にもね」と父は答えて、「……あの男は教育こそあつたが、しかし頭がなかつたよ」と言うのであつた。母は溜息ためいきをついて、考え込んでしまい、父も黙だまってしまった。わたしはこの会話の間じゆう、ひどくばつが悪かつた。この「……ひどくばつが悪かつた」のは、「……母は溜息ためいきをついて、考え込んでしまい、父も黙だまってしまった」。それなのに、自分だけお嬢さんのことで浮かれ気分になつていたからであろう。

一、夕食がすむと、わたしは庭へ出て行つた

さて、夕食がすむと、わたしは庭へ出て行つたが、わたしが垣根かきねのそばまで行くか行かないうちに、ジナイダの姿が目に入った。今度は彼女一人きりであつた。彼女は手に本を持って、ゆつくり小径こみちを歩いてゐた。わたしには気がつかないらしかつた。わたしは危うくやり過あやごすところであつたが、はつと気がついて、咳払いせきばらいをした。

彼女は振り返つたが、別に立ち止まろうともせず、ちらとわたしに目を注そそぎ、軽くほえむと、また目を本の方へ注いだ。——しばらくその場でもじもじしてゐたが、やがて重い心を抱いだきながら、わたしは立ち去つた。「……あの人にとって、わたしは何者だろう？」と考かんえた。——聞き覚えのある足音が、わたしの後ろで響ひびいた。ふり返つてみると、父が例の速い軽快な足どりで、わたしの方へやつて来たのである。「……あれが公爵こうしやく令嬢れいじやうかい？」と、父が尋ねた。「……お嬢さんです」と言うのと、「……お前あの人を知つてるのかい？」と聞くので、「……けさ公爵夫人こうしやくふじんの所で会つたんです」と言うのであつた。

父は立ち止つたが、急に睡かかとでくるりと一まわりして、もと来た方へ引つ返した。ジナイダのそばまで行くと、彼はうやうやしく会釈した。彼女も会釈を返したが、幾いくらか驚いたような顔を浮かべて、本を持った手を下へおろした。わたしは、父を見送りしてゐる彼女の様子に気がついた。父はいつも一種独特の、優美なさっぱりした見なりをしてゐたけれど、この時ほど彼の姿がすらりと格好よく見えたこともなければ、そのねずみ色

をした帽子が、心もち薄くなった髪の上に、この時ほど美しくのっかっていることもなかった。……わたしはジナイーダの方へ行こうとしたが、彼女はわたしには目もくれず、また本を読み読み向こうへ行ってしまった。——ここで最も大事なことは、父親が近場にいる時の「ジナイーダの反応」であり、父親が近場にいる時には、主人公には目もくれず、父親のほうばかりを見ているのである。

六、公爵夫人とお嬢さんが夕食にやってくる

さて、夕食の前に、わたしはまたもやポマードをつけて、再びネクタイとフロックとを身につけた。「……なぜ、そんなことをするの？」と、母が尋ねた。「……お前はまだ大学生にもなっていないし、それに試験だって受かるかどうか分かりもしないのにさ。第一、あの短い上着（ジャケット）にしたって、まだついこの間あいだこさえたばかりじゃありませんか、それをもつたいたないじゃないの！」と言うので、「……お客様が見えるので」とわたしは、ほとんど絶望したようにささやいた。「……馬鹿をお言い！ あれが何でお客様なものですか！」と言うので、降参するより外そとはなかった。わたしはフロックを短い上着（ジャケット）に着替えたが、ネクタイだけは取らなかった。

公爵夫人親子は、夕食の三十分前にやって来た。老婦人は、すでにおなじみの例の緑色の着物の上に黄色いシヨールを引っかけ、火のように赤いリボンをつけた流行おくれの室内帽をかぶっていた。彼女はすぐにも手形の話を持ち出して、ため息つきつき自分の境涯きょうがいを訴え、少しも体裁をかまわず無遠慮に「せがみ」立てるのであった。彼女は自分の家にいる時と同じように、騒々しく嗅かぎ煙草たばこをかいだり、勝手気ままに椅子の上で身体からだの向きを変えたり、もぞもぞ動きまわったりした。自分が公爵夫人だということは、まるで彼女の頭には浮かんて来ないようだった。やがて、公爵夫人は別れの挨拶をし始めた。「……どうかあなたの方のお引き立てを願います、奥様にも旦那様だんなさまにもお願いします」と。「……食べるものもないのに、見栄なんか何になりましょう」と言うのであった。

一方、この章で大事なものは、奥さんを前にした時の「ジナイーダの態度」であり、「……いかにも公爵令嬢こうしやくらしく、思いきつていかつい、ほとんど傲慢な態度を持していた。その顔には、冷やかな、ぴくりともしない尊大な表情が表れていた——わたしは人違いかと思うくらいであった。（これは自らの自尊心と奥さんに感づかれないように、いかにも公爵令嬢らしい態度を示しているのである）。また、「……父は食事の間じゅう、彼女のそばに席をおいて、持ち前の優美で落着き払った慰いんぎん（物腰が丁寧で礼儀正しい）態度で、（奥さんに感づかれないように）彼女をもてなしていた。父は時おり彼女の顔をちらりと見やった——すると彼女も、時々父を見返したが、それは「……実に奇妙な、ほとんど敵意をもった目つきであった」とある。これ一つを見ても、二人の関係はすでにあったということであり、「……敵意をもった目つき」という事であれば、恐らく、「……最近あまり逢ってくれないからではないかと思う……」。

そして、ジナイーダはわたしの方へは、まるつきり注意を向けようとしなかったが、帰り際に、ジナイーダはわたしの前を通り過ぎる時、「……今夜八時に、家へいらっしやいな、よくなって、きつとよ……」と囁ささやくのであった。

七、お嬢さんと五人の常連の人たち

さて、きっかり八時に、わたしはフロックを着こみ、頭髮を小高く盛り上げて、公爵夫人の住まっている離家の玄関に入った。例の老僕が気むずかしげにわたしをにらんで、しぶしぶ床几から腰をもち上げた。客間には陽気な人声が聞えている。わたしはそのドアを開けると、あつとばかり後ろへ一歩退った。部屋の本真中に置かれた椅子の上に、公爵令嬢が突っ立って、男の帽子を目の前に捧げている。そのまわりには、五人の男がひしめき合っていた。彼らは我勝ちに帽子の中へ手を突っ込もうとしていたが、彼女はそれを上へ上へと持ち上げて、一生懸命に揺さぶっていたのである。

ところで、この章では、公爵令嬢（ジナイーダ）を取り巻く「五人の常連」が登場して来る。それを本文で見ると、「……さあ、おはいんなさいよ」と言い、「……何をぼんやり立ってるの？ 皆さん、御紹介いたします。この方はヴォルデマルさん、お隣の坊ちゃんです。それからこちらは」と彼女は、わたしの方を向いて、順々に客を指さしながら、彼女は言い足した。「……マレーフスキ伯爵、お医者さまのルーシンさん、詩人のマイダーノフさん、予備大尉のニルマーツキイさん、それから、軽騎兵のペロヴゾーロフさん、この方にはもうお会いになったわね、どうぞ、お互いに仲よくなすって」と言うのであった。わたしはすっかりまごついてしまったが、医師のルーシンというのは、あの時庭でわたしに容赦なく恥をかかした、例の色の黒い男だと見分けがついた。

「伯爵！」と、ジナイーダはあとを続けた。「……ヴォルデマルさんの札を書いて上げてちょうだい」と言うのと、「……それは不公平です」と伯爵は軽いポーランドなまりで言い返した。しゃれた身なりをした、栗色の髪の方で、表情の豊かな鶯色の目と、白い細かい鼻をして、小さな口の上に華奢な髭を生やしていた。「……この人はわれわれと一緒に賭けをしなかったんですから」と言うのと、「……不公平です」と、ペロヴゾーロフと、もう一人別の男が相槌を打った。その男は、予備大尉と呼ばれた人物で、年のころ四十前後、醜いほどのあばた面で、黒ん坊のように髪が縮れた上、猫背で足が曲がって、肩章のない軍服を着て、胸のボタンをはずしていた。——ここでは「五人の常連」の中の何人かの特徴などが大まかに書かれていることになるかと思う。

一、賭けごと遊び

令嬢は、「……札をお書きなさいって言うのに」と繰り返した。「……それじゃもう暴動よ！ ヴォルデマルさんは、初めてわたしたちと一緒にになったんだから、今日はこの方に規則を当てはめるわけにはいきません。ぶつぶつ言わないで書いてちょうだい、あたしそうしたいんだから」と言うのであった。伯爵は肩をすくめたが、素直に一札すると、指輪をふんだんに嵌めた白い手にペンをとり、小さな紙ぎれを裂き取って、それに書き始めたのであった。

さて、ここでは、「五人の常連」の中の「医師」（ルーシン）と「詩人」（マイダーノフ）という二人の人物のその特徴などが記述されているかと思う。まず、「医師」（ルーシン）という人物であるが、彼は、「……少なくとも、ヴォルデマル氏にわけを説明させていただきましよう」と言い出し、「……なにしろ、すっかりまごついておられるようだから。

実はね、君、僕らは賭け事をして遊んでいるんだが、公爵令嬢が罰金を受けられることになったので、当たり前籤を引いた人は、令嬢の手に接吻する権利を得るわけなんです。わたしの言ったことがわかりましたか？」と言うのであった。つまり、「医師」（ルーシン）という人は、この「五人の常連」の中でも「中心的なしきり役的存在」であるということであり、その証拠として、自ら「……わたしは式部官として、すべて規定通り行なわれるように、監視する義務があります。ヴォルデマル君、片膝をおつきなさい。われわれの仲間ではそういうことに決まってるんですから」と言うのであった。

一方、「詩人」（マイダーノフ）という人物であるが、この人は、本文では次のようになっている。つまり、「……マイダーノフさん」と令嬢は、背の高い青年に声をかけた。それは、やせた顔に小さな目をしよぼつかせて、黒い髪の毛を長く伸ばした男である。「……あなたは詩人なのだから、寛大でなくちゃいけないわ。あなたの札をヴォルデマルに譲っておあげなさい。そうすれば、あの人のチャンスが一つきりでなく、二つになるわけですからね」と言うと、マイダーノフは、首を横に振って、長髪をさつと揺り上げた。

わたしは一番あとから帽子の中へ手を突っ込んで、一枚の札をとって開いて見ると、ああ！ その札の上には『接吻』の二字があった。その時わたしの心はどんなだったか！

「接吻！」と、わたしは思わず叫び声を上げた。「……あつぱれ！ この人に当たりだわ」と、令嬢がすかさず引き取って、「……まあ嬉しいこと！」と椅子から下りて、何とも言えない晴れ晴れとした甘い目つきで、わたしの顔をのぞき込んだ。わたしは心臓がおどりはしそうであった。「……あなたも嬉しくって？」と、彼女はわたしに尋ねた。「……わたしですか？」としどろもどろに言った。すると、「……その札は僕に売ってください」と、不意にわたしの耳のすぐそばで、軽騎兵のベロヴゾーロフがわめき出した。「……百ルーブル出すから」と言うのであった。

わたしは忿怒に充ちた目つきで、軽騎兵将校の言葉に答えたので、ジナイダは手を叩くし、ルーシンは「大出来！」と叫んだほどである。「……それはそうと」と、ルーシンは続けた。「……わたしは式部官として、すべて規定通り行なわれるように、監視する義務があります。ヴォルデマル君、片膝をおつきなさい。われわれの仲間ではそういうことに決まってるんですから」と言うのであった。——わたしは片膝をつこうとしたが、思わず両膝ついてしまって、いとも不器用にジナイダの指に唇をつけた。その拍子に相手の爪で、鼻の先に軽いひっかけ傷をこしらえてしまった。

ところで、まだ十六歳の主人公は、「……格式のやかましい貴族屋敷で成長して、きびしく生まじめに教育された少年のわたしは、こういう騒音や叫声や、ほとんど乱暴なくらい無遠慮な浮いた気分や、前例のない未知の人々との交際などで、すっかりのぼせ上がってしまい、まるで酒に酔ったようであった。わたしはほかの誰よりも大きな声で、笑ったりしゃべったりし始めた。そして、わたしはうれしくて有頂天になっていたの、誰の冷笑も誰の白眼も、いわゆる牛の角に蚊が止まったほどにも思わなかった。

そして、「……ジナイダは、相変らずわたしをひいきにして、少しもそばから放そうとしなかった」とある。これは一体なぜなのかと問えば、その一つは、彼女（ジナイダ）にとつて、この十六歳の主人公はそれなりに気に入っていたからだろうが、それに加えて、もう一つは、やはり「父親の息子さん」ということで特別の存在という想いがあったのではないかと思う。

二、その他のいろいろな遊び

賭けごとに飽きると、——今度は、縄なわまわしの遊びを始めた（それは、縄の輪の中に鬼がすわって、その輪をまわしながら、周囲の者の手を打つ、打たれた者が代わって鬼になるという遊戯であるが）、ああ！ わたしがついうつかりして、鬼になった彼女から、したたかピシヤリと強く激しく指を打たれた時、わたしはどんなに深い歓喜の念を覚えただろうか！ わたしはそのあとで、わざとぼんやりしているようなふりをしたが、彼女はわたしをからかって、わたしの差し出した手に触れようとしなかったのである。

しかし、わたしたちがその晩にやったことは、まだまだそれだけではなかった！ ピアノも弾けば、歌もうたい、踊りもおどれば、ジプシーの群れの真似まねまでもした。ニルマーツキイは熊くまに仕立てられて、塩水しおみずを飲まされた。マレーフスキイ伯爵はくしやくは、トランプのいろいろな手品を次から次へと披露したが、最後にトランプをうまく切つて、ヴィスキ（トランプ遊びの一種）の切り札を一つ残らず自分の手に入るようにしてしまった。それに対して、ルーシンは「……彼に祝辞を述べる光栄を有する」ことになった。マイダーノフは、自作の劇詩『殺戮者』の一節を朗読したが、（時代はロマンティズムの全盛期に取材したものであった）、彼は黒い表紙に血のような色で表題を書いて、この作品を出版するつもりだと言っていた。それからわたしたちは、イヴェールスキイ門からやつて来た小役人の膝ひざから帽子を盗んで、それを返してほしくば、コザック踊りをおどれと言ったり、老僕ヴォニフアーチイに婦人用帽子ぼうしをかぶせたり、——そうかと思うと、ジナイーダは自分で男の帽子をかぶつたり……とても一々数えきれないほどである。ただ軽騎兵けいきへいのベロヴゾーロフだけは、腹立たしげに眉まゆをひそめたまま、だんだん隅すみっこへ引つ込みがちになった。……どうかすると、目が充血して、顔が真赤になり、いまにもみんなに飛びかかって、わたしたちを木こつぱ同然に、四方八方へ投げ散らしそうな気配を示したが、ジナイーダがちらりと彼を見て、指を立てておどかすと、彼はまたこそ隅すみっこへ引き下がるのだった。しまいには、さすがのわたしたちもへとへとになってしまった。公爵夫人こうしやくふじんは、彼女の言葉を借りると、そんなことには一向平気な性分だ——どんなに騒がれようがビクともしないたちだったが——それでもやはり疲労を覚えて、休みたいと言いつ出した。夜の十一時過ぎに夜食が出たが、それは古いこちこちになったチーズと、ハムを刻み込んだへんてこな冷たい饅頭ビロシクきりであったが、それがわたしにはどんな上等のパイよりうまく思われた。葡萄酒ぶどうは一瓶びんきりで、しかもどす黒い色をして、口のところがふくらんだ、何だかきつれつなものであった。しかも中の酒もばら色の色粉いろこのにおいがした。もつとも、誰一人それは飲まなかった。へとへとに疲れて、気の遠くなるほど幸せな感じをいだきながら、わたしは離家はなれを出た。お別れにジナイーダはわたしの手を堅く握って、またもや謎なぞのような微笑をもらった。——ここでは、いろいろな遊び（作者の思い出せるだけ思い出しながら）その一つ一つを具体的に挙げて、みんなで遊び尽くし、やがて、へとへとに疲れて、気の遠くなるほど幸せな感じをいだきながら、わたしは離家はなれを出て、家へと帰ったということである。

三、家へと帰る

さて、次の場面は、家に帰った後の、当時十六歳の主人公（作者ツルゲーネフ）の「心の中の情景」と「自然の夕立の遠雷の情景」とを見事に一つに「融合」（コラボ）させた、実に美しい「詩的表現」になっているかと思う。つまり、主人公の「心の中の情景」というのは、「……（今夜）わたしの感じ味わったことは、実に新しくまた甘美なものであった。……わたしはかすかに目をあたり配りながら、身動きもせずすわったまま、静かに息をついていた。そして間々に、今夜のことを思い出して、言葉もなく笑ったり、また時には『……自分は恋をしているのだ、これがそうなのだ、これが恋なんだ』と考えながら、心中ひそかにぞっとするのであった」とある。これは、自分の「心の中」にこのような想いが生じたことに我ながら驚いているのである。

一方、「自然の夕立の遠雷の情景」というのは、「……わたしはなつかば身を起こして、窓の方をながめた。窓の格子は、神秘らしくぼんやりと白くみえるガラスの上に、くつきりと浮かび出していた。夕立だ——とわたしは思った。それはまさしく夕立であった。けれど、非常に遠いところで降っているので、雷鳴さえ聞こえないくらいであった。ただ無数に枝分かれしたような長い稲妻が、絶えず空に鈍く光っているばかり。それは光ると言うよりは、むしろ死にかかった鳥の両翼のように、ぴくぴくと引つ攀れながら、震えている様であった。——わたしは起き出して窓に近寄ると、そのまま朝まで立ち尽くしていた。……稲妻は一瞬間も止まなかった。それは俗に言う雀の夜（夏至頃の短夜）である。わたしは、ひっそり静まった砂原や、ネスクーチヌイ公園の木立の黒々した大きな森陰や、弱い稲妻がひらめく度に震えるような、遠い建物の黄色っぽい正面（ファサード）などを見つめていた……じつと見つめたまま……どうしても目を離すことが出来なかった。この音もない稲妻の控え目がちのひらめきは、あたかもわたしの心中に燃え上がっている、言葉もない秘密な衝動（それは恋・初恋）に呼応するように思われた」ということである。

そして、「……日の出とともに、稲妻も次第に薄れ、消えてしまった。わたしの心の中でも稲妻は消え失せた。わたしは非常に疲れと静けさを感じたが……ジナイーダの姿は、依然として勝ち誇るもののごとく、わたしの魂の上を翔けめぐっていた。とは言え、やがてその姿も自然と落ちついて来たように見えた」となるのである。

そして、最後は、「……おお、素朴なる感情よ、ものあわれを知り初めた魂の柔らかき響きよ、その優しさと静けさよ、初恋の感激のとりけるばかりの悦びよ。——汝らは今そもいずこ、ああ、そもいずこ？」となって行くが、これは、「……まだ十六歳の純朴な頃の感情よ、ものあわれを知り初めた魂の柔らかき頃の響きよ、その優しさと静けさよ、初恋の感激のとりけるばかりの悦びよ。それは、まさに「純粋な心」だからこそ深く味わうことができ得るものであり、俗にまみれた大人たちの主に「性欲を目的とした恋愛」では、このような「精神的な喜び」を深く味わうことはでき難いのである。

つまり、作者（ツルゲーネフ）の「はつ恋」というのは、「……ある日、ある時、ある場所で、突然、ばったりと出逢った相手（異性）に、まさに『一目惚れ』に深く陥るような劇的なものであったと同時に、心の底からの相手への純粋な一途な恋心とを兼ね合わせたものであった」ということになるのである。

八、父の性格と父との関係

さて、その次は、「父の性格と父との関係」が実に事細かに記されている場面であり、本文では次のようになっていいる。――まず 翌朝、わたしがお茶に下りて行くと、母はわたしに小言を言ったが、思ったほどのことはなく、ゆうべ何をして遊んだか、その様子を話すように言いつけた。わたしは大部分の細部ディテールをばぶいて、言葉すくなく返答をした。それに対して、母親は、「……とにかく、あの人たちはまともな連中じゃありません」、「……だから、お前もあんなところへ出入りなんかしないで、ちゃんと勉強して、試験の準備をするんですよ」と言うのであった。（これはまさに母親の「思いや考え方」になるかと思ふ。）

一方、お茶のあとで、父はわたしの腕をとって、一緒に庭へ出て行きながら、わたしがザセーキナの「家で見ただけを何から何まで話させた」とある。この「何から何まで話させた」とすれば、それは余程の「興味や関心或いは何か気になる事」があつたからに違いないが、それが一体何かはここでは記述されていない。そして、主人公（ツルゲーネフ）から見た当時の「父親像」が事細かに回想されているが、それは次のようなものである。つまり、「……父はわたしに奇妙な影響力を持つていたし、また、わたしたちの関係も奇妙なものだった。父はほとんどわたしの教育に干渉しなかつたが、さりとて、わたしを侮辱するようなこともない。彼は、わたしの自由を尊重し、更に進んで、ちよつと妙な言い方だが、わたしに対して慰懃いんげん（優しく丁寧）でさえあつた。ただし、わたしをあまり近く寄せつけないのであつた。わたしは彼を愛し、惚れ惚れと彼に見とれていた。わたしの目には、父が男の中の男みたくに思われたのである。だから、實際の話、もし彼の手が絶えずわたしを押しつけるのを感じなければ、いかほどの熱情をもって彼に愛着したかわからない！ その代わり気さえ向いたなら、彼はほとんど一瞬間の間に、わずか一挙手一投足の労をもって、限りなく信頼の念をわたしの心に呼びさます力を持っていた。わたしの魂の扉とびらは開かれ――わたしは聡明な友達か、親切な先生でもあるように、父とおしやべりを始めるのだが、やがて、彼はまた突然わたしを振り捨ててしまうのであつた。――彼の手は再びわたしを押しつけた――優しく柔らかな動作しぐさではあるが、とにかく押しのけるには違ひなかつた。（彼は父親が好きであつたが、父はいつも一定の距離を保つていた。）

父も時には、快活な気分気分に襲われることもあつた。そんな時は、彼はまるで子供のようになり、わたしとふざけたり、跳ねまわったりするのを辞さなかつた（総じて彼は、激しい肉体の運動を愛していた）。一度――あとにも先にもたつた一度きりだが、父は何とも言えぬ優しい愛情を、わたしに示したことがあつた。その時、わたしはほとんど泣き出しそうになつたことがある。……しかし、こうした快活の発作も、優しい愛情も、すぐまた跡あともたもなく消えてしまう。そして、たつた今二人の間に起こつたことも、未来に対して何の希望も繋つながせない――それは、まるで夢でも見たかのような気持であつた。時々、父の賢かしこそうな、美しい、明朗な顔をじつと見てみると、胸がどきどきして来て、身も心も父の方へ吸い寄せられるような気がした。すると、父はわたしの心中を察したように、ほんのついでみたいにわたしの頬を軽く叩いて、それなり向こうへ行つてしまふか、それとも何か仕事を始める。そして、ほかの人には真似まねのできない一種独特の態度で、急に全身石のように冷たくなつてしまふ。わたしも萎縮いしゆくしてしまい、同じように冷たくなるのであつた。

わたしに対する彼の愛情のきわめて稀まれな発作は、口にも出さないが一目でそれと察せ

られる私の哀願あいがんによって、ひき起こされたものでは決してない。それは、いつも思いがけなくやって来るのであった。そして、後年、父の性格をいろいろ考えて見た時、わたしはこういう結論に達したとある。それは、「……父はわたしや家庭生活などにかかずらつている暇ひまがなかったのである。彼はもつと別なもの（女性たち）を愛ひまして、この別なもの（女性たちとの恋愛関係）を十分に享樂じやうらくしていた」のである。

そして、次に「父親自身」の肉声にくこゑが思い出されて来るのである。それは、「……できるだけのものを自分で取れ。そして、自分を他人の手に任まかしちやいけない。自分が自分自身のものになるということ（自分と自分自身との一体）——そこに人生の一切の妙味があるのだ」と、ある時、父はわたしに語った。（これはその通りかも知れない）。またあの時、わたしは若き民主主義者として、彼の前で自由を論じ始めた（彼はその日、わたしの言葉で言うと「善良な」気持きもちになっていた。そのような時、彼を相手に何でもしやべることができた）。「……自由か」と彼は繰り返した。「……一体自由を人間に与えるものは何か。お前まへそれを知っているかね？」と聞くので、「……何です？」と問い直すと、「……意志だ、自分の意志だよ。こいつが自由よりもつと貴い権力さえ与えてくれるのだ。欲するということが出来たら、自由にもなれば、命令を下すことも出来るのだ」と言うのであった。（これが主人公の父親の確たる「人生観」と「生き方」であり、いわば「強い意志を以て自分の人生を生き抜く」ということである。）

父は何よりも先に、何よりも強く生きることを欲した——そして彼は生きた……もしかしたら、自分は長く人生の『妙味』を享樂じやうらくすることが出来ないと、その時から予感していたのかも知れない。彼は四十二才で死んだのである。

わたしは、ザセーキン家を訪問した顛末てんまつを事細かに父に物語った。父はベンチに腰かけて、鞭むちの先で砂に何か書きながら、なかば注意深く、なかば放心したようなふりで、わたしの話を聞いていた。父は時々笑い声を立てて、妙に晴れやかな、ふざけたような目つきで私を覗のぞきながら、簡単な質問や反駁はんぱくでわたしに拍車をかけた。わたしははじめジナイーダの名前さえ思おもいきつて口にする勇氣ゆきが出なかつたが、とうとう我慢しきれないで、盛んにその贊美さんびを始めた。父は依然として軽く笑い声を立てていたが、やがてしばらく考え込んだ後、伸びをして立ち上がったとある。

この間じゅう、父親が何を考かんえていたかは作者にもよく分からないので、そのまま思おもい出すままに記述きじゆつしているのである。例えば、ドラマや小説などでは、登場人物のすべての「心の中」が分かるように作られているが、しかし、現実にはそのようなことは決してあり得ず、お互い相手が今何を考かんえているかなどは、相手が素直に話してくれない限り、誰にも分かりようがないのである。それゆえ、父親がなぜザセーキン家を訪問した顛末てんまつなどを聞ききたかつたかは、父親が素直に話してくれない限りは、分かりようがないのである。

わたしは父が家から出る時、馬に鞍くらを付けるように命じたのを思い出した。父はすぐれた乗り手であり——レリー氏などよりずっと早くから、どんな荒馬あらくまをも馴ならすのに妙を得ていた。「……僕も一緒に行っていい、お父さん？」とわたしは尋ねた。「……いけない」と彼は答え、その顔は例の（距離を保つ）無関心な優しい表情を浮かべた。「……乗のりたけりや、一人でお行き。そして、わたしは行かないからって、馭まよ者にそう言いつとくれ」と言うのであった。

彼はくるりとわたしに背を向けて、足早に立ち去った。わたしはその姿を見送っていた

が——やがて父は門外へ消えてしまった。そして、塀へいに添くっうて動いてゆくその帽子が見えた。彼はザセーキン家へ入って行った。——父はそこに一時間以上はいなかった。(父親は公爵夫人こうしやくふじんに会い、ジナイーダにも会って何か話をするようなことがあったのかどうか?)、それからすぐに町へ出かけて、ようやく夕方に帰ってきた。

夕食後、今度は私がザセーキン家へ行った。客間に入ってみると、老公爵夫人こうしやくふじんが一人きりしかいなかった。わたしの姿すがたを見ると、編み針はりの先で、室内帽の下から頭をかきながら、出し抜けぬにわたしに向って、請願書を一通清書してもらえまいかと頼んだ。「……ええ、しますとも」と、わたしは答えて、椅子の端に腰を下ろした。「……でもね、気をつけてね。なるべく字を大きく書いてくださいよ」と、うす汚れた一枚の紙を渡しながら、公爵夫人こうしやくふじんはこう言った。「……そして今日じゆうに願えませんか、坊ちゃん？」と言うので、「……今日じゆうにやりますとも」と答えるのであった。

隣室りんしつの戸が心もち細めに開いて、そのすき間からジナイーダの顔がのぞいた——青ざめた、もの思わしげな表情で、髪は無造作に後ろへはねのけてあった。彼女は大きな冷たい目でわたしを見ると、そのまま静かに戸を閉めた。「……ジーナー、これ、ジーナー！」と老夫人が呼んだが、ジナイーダは返事をしなかった。わたしは老夫人の請願書を持って帰り、一晩じゆうそれにかかっていた。(このジナイーダの表情が何を意味するかはよく分からないが、ただ「嬉しいこと」があったという表情ではないような感じがする。)

九、令嬢の性格と常連たちとの関係

さて、この章は、主人公が『狂恋きやうれん』(正気でなくなるほどの激しい恋)に陥おちることでよって、主人公の「心の中」は一体どのような状態になったのかを詳しく説明しているところであり、まず、「……わたしは新しく勤めにでも就いた人のような気持を経験した。わたしはもうただの少年ではなく、恋する人となったのである」とある。例えば、今までは「勉強」のことに中心に考えていたが、『狂恋きやうれん』後は、むしろ「彼女」のことに中心に考えるようになってしまった。それを本文で見ると、次のようなものである。

ジナイーダがそばにいないと、わたしは鬱鬱うつうつとして楽しまなかった。何一つ頭に入らず、仕事という仕事がつかなかった。毎日朝から晩まで、一生懸命に彼女のことを考えていた。わたしは鬱鬱うつうつとして楽しまなかった。しかし、彼女の前に出ても、さして心は安まらなかつた。わたしは嫉妬うらやましたり、わが身のしがなさ(取るに足らぬ存在)を意識したり、馬鹿かみたいになすねてみたり、馬鹿馬鹿しく奴隷どれいのように服従したりしたが、それでも、打ち克かち難い力がわたしを彼女の方へと引きつけていた。彼女の部屋の敷居しきいをまたぐ度に、幸福のおののきに総身そうみが震えるのだった。わたしが彼女に恋していることを、ジナイーダはすぐさま見抜いた。それに、わたしも隠し立てしようなどと思わなかつた。彼女は、わたしの情熱を面白い事のように思い、からかったり、甘やかしたり、苦しめたりした。他人のために最大の歓喜と、深い悲哀の唯一の源泉になり、何の責任もない絶対の力を持つ原因となるのは、快いものであるが、わたしはジナイーダの手にかかると、まるで柔らかい蠟ろうみたいなのであった。(つまり、彼女の存在とその言動が自分の大きな「喜びや悲しみ」の唯一の源泉や原因になっていることは、快いものであるが、わたしはジナイーダの手にかかると、まるで柔らかい蠟ろうみたいなのであり、彼女の言うがままされるがまま

の人間になってしまふということである。)

とは言え、何もわたしだけが彼女に恋していたわけではなかった。彼女の家にやってくる男という男は、みんな彼女にのぼせ上がっていたし、彼女の方では、それをみんな鎖につないで、自分の足もとに跪かせていたのである。彼らの心中には希望、時には不安の念を呼び起こしたり、自分の気まぐれで思うがままに彼らを操ったりするのが(それを彼女は、人と人とをぶっつけ合わすと言っていた)、彼女を楽しませるのであった。しかも、彼らはそれに逆らおうなどは夢にも思わず、喜んで彼女に服従していた。(いわば「女王様」の様に振る舞っていた)。彼女の「生き生きとした美しいからだ」の中には、「……狡猾さと暢気さ、技巧と単純、平静と活発、こういうものの混じり合った一種特別な魅力があふれていた。彼女の一言一行、彼女の一举手一頭足には、微妙な軽やかな美が漂って、すべて何から何まで独自の遊びの力が感じられた。彼女の顔も絶えず変化して、同様に終始たわむれていた。それはほとんど同時に冷笑と、物思いと、情熱を現わしているのであった。風のある晴れた日の雲の影のように、軽くすばしこく種々様々な感情が、絶えず彼女の目や唇をかすめていた」とある。(このような女性にまだ十六歳の少年は完全に「心を奪われてしまった」ということである。)

一、彼女の崇拜者一人一人の具体的な様子

さて、ここでは彼女の崇拜者の中の四人。一人目は、軽騎兵のペロヴゾーロフという人物であるが、彼は、彼女のためなら、喜んで火の中へでも飛び込みかねなかった。自分の知力やその他の才能に自信を持ってない彼は、絶えず彼女に結婚を申し込んで、ほかの男たちの言っているのは、所詮は空念仏(口先だけ)に過ぎないと、ほのめかすのであった。

二番目は、詩人のマイダーノフという人物であるが、彼は、彼女の魂の詩的琴線に応じた。ほとんどあらゆる文士の例に洩れず、彼もかなり冷たい人間でありながら、彼は一生懸命にジナイーダを崇拜していると、当人に誓ったのみならず、恐らく、自分自身にさえ、それを信じさせようとしていた。そして、果てしない無数の詩を以って、彼女に対する賛美を表白(言葉で表)しては、どこか不自然でもあれば真剣な感激の調子で、それを彼女に朗読して聞かせた。彼女はそれに同情もすれば、また少しからい気味でもあった。彼女はあまりこの男を信用していなかったので、さんざん彼の心情を吐露した作品を聞いた挙げ句、プーシキンを朗読させた。それは彼女の言葉だと、空気を清めるためであった。

三番目は、医師のルーシンという人物であるが、彼は、皮肉屋で、露骨な毒舌をふるう医師であったが、彼女を見抜いている点では、誰よりも一番であった。そして、陰でも、目の前でも、いつも彼女の悪口ばかり言っていたが、彼女を愛していることも人後に落ちなかった。彼女は、この男を尊敬してはいたものの、さりとして決して容赦はしなかった。そして、時々かくべつ意地悪そうな満面の色を浮かべながら、お前だってやはりわたしの手のうちに握られているのだ、ということを思い知らせるようにした。

四番目は、マレーフスキイ伯爵という人物であるが、彼とジナイーダとの関係が、一番わたしには分かりにくかった。なかなか美男子であり、器用でもあり利口でもあったが、しかし、ほんの十六歳の少年に過ぎないわたしでさえ、この男には何かしら油断のならぬ、うさん臭いところがあるような気がした。しかもジナイーダが、それに気づいていないの

が、わたしは不思議でならなかった。ひよつとすると彼女は、そのうさん臭くささに気づいていながら、別にそれが厭いやでなかったのかも知れないとある。

最後は、ジナイーダ本人のことであるが、彼女はみずから「……わたしは心というものを持たない翻媚コケツト女なのよ。わたしは役者の生まれつきなんだから」と言っている。これは、「……わたしはまじめ一方な女性などではなく、むしろ男を惑わすような女性であり、その場その場の場面や状況に応じて臨機応変に自然と（無意識に）自分を演じ分けてしまう」そういう「生まれつきの役者なのよ」と言っている。また、「……（彼女の）教育も（途切れた）不規則なものであり、交友や習慣も風変わりだし、しょっちゅう母親はそばにいるし、家の内情は貧乏で乱脈だし、それから第一、若い娘の身で気まま勝手はしたい放題、それに、ぐるりの連中より一段も二段も上だという意識もあるし——というわけで、そうした一切合切いっさいがっさいが合わさって、彼女のうちに、一種こう人を小馬鹿にしたような無頓着むとんちやくの態度や、投げやりな傾向を助長したのだ」とある。

彼女自身は、いかなることが起こっても——老僕ろうぼくのヴォニファーチイが来て「砂糖がきれました」と告げても、何か忌むらしい世間の陰口かげぐちが耳に入ろうが、また客同士が喧嘩けんかを始めようと——彼女はただ、豊かな捲まき髪を一振ひと振りして、「くだらない！」と言うだけで、たいして気にもかけなかったのである。

二、ジナイーダの好きなタイプが吐露される

さて、ここでは、主人公が崇拜者に「嫉妬」したという実例が出てくるが、それは、「……例えば、マレーフスキ伯爵が狐きつねのように、狡猾こうかつらしくからだを揺さぶりながら、彼女のそばへ寄って行って、彼女の掛けてある椅子の背に、優美な格好かっこうをしてもたれかかり、さも得意げな、追従たらたら薄笑いを浮かべながら、彼女の耳に何かささやき出す。すると彼女は、両手を胸に組んで、注意深く彼をながめ、自分でも笑い笑い首を振っているような時など。「……あなたは、どこが好きで、マレーフスキさんなんかを家へ入れるのです？」と、ある時わたしは彼女に聞いたことがあった。「……だって、あの人はあんな立派な髭ひげをしてるんですもの」と、彼女は答えた。「……でもそんなこと、あなたの知ったことじゃないわ」と言うのであった。

そして、ここで最も大事な言葉は、次の言葉であり、「……わたしがあの人を愛していると、あなた思っているのじゃない？ ちがうわ。わたし、こっちで上から見下ろさなくちゃならないような人は、好きになれないの。（だとすれば、ここに集まる崇拜者たちに本気で惚ほれることはないのである）。わたしの欲しいのは、向うでこっちを征服してくれるような人。……でもね、そんな人にぶつかりっこはないわ、ありがたいことにね！ わたし、誰の手にもひっかかりはしないわ、金輪際こんりんざい！」とある。「……じゃ、あなたは決して恋をしないというわけですね」と聞くと、「……おや、あなたはどうかの？ 一体わたしあなたを愛していませんか？」と彼女は言い、手袋の先でわたしの鼻をたたいた。

全くジナイーダは、さんざんわたしを慰みものにした。三週間というものの、毎日わたしは彼女に会っていたが、（これは凄すごいい！）、その間に彼女がわたしに向ってやらなかったことは、ほとんどないくらいであった。彼女はあまり家へ遊びに来なかったが、わたしもそれを格別残念に思わなかった。家に来ると、彼女は社交界の令嬢——公爵令嬢こうしやくに早交

りしてしまふし、それに、わたしも彼女を避けるようにしていた。わたしは、母に見破られるのが怖かったのである。母はジナイダに頗る悪意を抱いて、不愉快な気持でわたしたちを監視していた。父の方は、大して怖くなかった。父は、わたしには気がつかない様子だったし、彼女とはあまり話をしなかったが、その話ぶりは何か特別かしこく、意味ありそうに思われた。

さて、この最後の「……父親は、彼女とはあまり話をしなかったが、その話ぶりは何か特別かしこく、意味ありそうに思われた」とある。これはもちろん、妻に感づかれないように細心の用心をしているのであるが、それでもやはり「父親と彼女」との間で醸し出される雰囲気には、自然と「不思議な感じ」があったということである。

三、彼女の「心の中」がついに見えてきた

わたしは、勉強も読書も止めてしまった。郊外を散歩したり、遠乗りに出かけるのさえ中止した。ちようど足を縛られたカブト虫のように、わたしは絶えず、なつかしい離家のまわりをぐるぐるまわっていた。自分でもいつまでもそこを立ち去りたくない思いであったが……そうは出来ない相談であった。それは、母が始終小言も言うし、時には当のジナイダが、私を追い払うからであった。そのような時は、わたしは自分の部屋に閉じ籠もるか、それとも庭のいちばんはずれまで行つて、石を積んだ高い温室の崩れた残りによじ登り、往来へ向けた壁に足をぶら下げたまま、幾時間も幾時間もじっとすわつて、何一つ見ようとせず、ただいつまでも空をながめていた。

太陽と風は、まばらな枝でそつと戯れていた。ドンスコイ修道院の鐘の音が、時折り、静かにわびしく響いて来た——わたしはじつと坐つて、見かつ聞いていた。すると、何か名状しがたい感じがわたしの心を満たした。その中には憂愁も、歓喜も、未来の予感も、希望も、生の恐怖も、その他ありとあらゆるものが含まれていたのだ。けれどわたしはその時は、そういうことがいつさい分からなかったから、自分の内部に発酵しているものに、何一つ名をつけることが出来なかつたろう——それとも、これらすべてのものを、ただ一つの名で呼んだかも知れない——それは「ジナイダ」という名であった。(つまりこういう心情を生み出しているのが、まさに「ジナイダ」の存在であり、もし「ジナイダ」に出逢つていなくなつたならば、もちろん、このような「心情」など経験することもなかつたのである。)

ところがジナイダは、まるで猫が鼠をおもちやにするように、絶えずわたしをもてあそんでいた。彼女はわたしに媚態を見せて、わたしを興奮させたり、とろけるような気持にさせたりするかと思うと——急にすげなく突き放してしまう——するとわたしはそばへ近寄ることも、また、その顔をながめることも出来なくなつてしまうのである。

今でも覚えているが、彼女は四、五日続けて、わたしに冷淡な態度をしめたことがあった。(これは彼女の心が荒れているから)、わたしはすっかり怖気づいて、こわごわ離家へ駆け込んで、なるべく老公爵夫人のそばを離れないようにした。というのも、丁度その時分、夫人は恐ろしく怒りほくなつていて、始終がみがみ怒鳴っていた。それは、例の手形の件がうまく行かないので、もう二度も巡査と言ひ争ひをしていたのである。

ある時、わたしは例の垣根づたいに庭を通つて——ジナイダの姿が目映った。

彼女は両手を突いて、草の上に坐^{すわ}ったまま、身動きもしないでいた。わたしはそっと立ち去ろうとしたが、彼女は急に頭をあげて、命令するような手つきをして見せた。わたしは、その場に立ちすくんだ。はじめ彼女の合図が分からなかったのである。彼女はもう一度同じようなことを繰り返した。わたしは、すぐさま垣^{かきね}根を飛び越えて、大喜びで彼女のそばへ走って行った。ところが、彼女は目つきでわたしを制し、二歩ばかり隔てた小道を指さした。どうしていいやら分からず、もじもじしながら、わたしは道ばたに膝をついた。彼女の顔があまりに青ざめて、痛ましい悲哀と深い疲労の色が、その一つ一つの輪郭に現われていたので、わたしは心臓が締めつけられるような気がした。わたしは思わず、「……どうしたのですか？」とつぶやいた。ジナイーダは手をさし伸べて、何かの草をむしり、ちよつと一つ歯でかむと、そのままぼいと向こうへ投げてしまった。「……あなたはほんとうにわたしを愛してて？」と、ついに彼女は聞いた。

わたしは、何とも答えなかった。——それに何のために返事をする必要がある。「そう」と、依然としてわたしを見つめながら、彼女は繰り返した。「……そりやそうね。まるで同じ目だわ」と彼女はささやいた。（ここは非常に大事なところであり、まず、彼女は、「……あなたはほんとうにわたしを愛してて？」と聞くと、主人公は、何とも答えなかった。すると、彼女は、依然としてわたしを見つめながら、繰り返した。「……そりやそうね。まるで同じ目だわ」とささやいた。この「同じ目」とは「父親の目」とまるで同じであり、まさに「彼女と父親」との間^{あいだ}で「同じような会話」があった）のである。だからこそ、「……世界の果てへでも行ってしまいたい。わたしこんなことは我慢できない。わたしには納まりがつけられない……それに、いったい何がこの先わたしを待っているのだろう！……ああ、苦しい……ほんとうになんて苦しみだろう！」と言うので、「……どういうわけで？」とわたしはおずおずと尋^{たず}ねた。

ジナイーダは返事をしないで、ただ肩をすくめただけだった。わたしはやはり膝^{ひざ}をついたまま、深い憂悶^{ゆうもん}をいだきながら、彼女を見つめていた。彼女の言った一言^{ひとこと}一言は、深くわたしの胸に食い入った。わたしはその瞬間、もし彼女の悲しみが消えるものなら、喜んで命を投げ出しそうな気持であった。わたしはじつと彼女を見つめていた——そして、なぜそんなに苦しんでいるのか分からないにも、彼女が堪^たえ難い悲哀の発作に駆られて庭へ出ると、いきなり足を難^なぐ（すくわれた）ように、大地へ身を投げるありさまを、まざまざと心に描いてみた。（父親との関係がうまく行っていないのである。）

あたりは一面光に満ちて、青々としていた。風は木立の葉をそよがせ、ジナイーダの頭の上まで伸びた木苺^{きいちじ}の長い枝^{えだ}を、時々揺さぶっていた。「……わたしね、あなたが詩の朗読するのが好きよ。あなたの朗読はまるで歌だけど、そんなことかまわないわ、若い証拠ですもの。あの『グルジャの丘』を読んで。でも、まずすわって」と言うのであった。

わたしは腰を下ろして、『グルジャの丘』（プーシキンの詩）を朗読した。「……恋せでやまぬ性^{さが}なれば」（恋せずにはいられない性^{さが}なれば）とジナイーダは繰り返した。「……そこが、詩のいいところなのね。つまり、「……この世にないことを言ってくれる。しかも、実際あるものよりすぐれているばかりでなく、ずつと真実に近いことを聞かしてくるから」、「……愛せでやまぬ性^{さが}なれば——恋をしたくないと思っても、せずにはいられないんだわ！」と彼女は再び口をつぐんだが、急にぴくりとなって立ち上がった。「……さあ、行きましょう。（詩人の）マイダーノフがお母さんの所に来てにいるから。わたしに

自作の叙事詩を持って来てくれたんだけど、うっちゃって出て来てしまったの。あの人もやはり今きつと悄気しよげてるわ。……でも、仕方がないのよ！ あなたもいつか分かるでしょうが……でも、わたしに腹を立てないで頂戴ね！」と言うのであった。

ジナイーダは、忙しそうに私の手を握って、先に立って駆け出した。二人は離家はなれへ帰った。(詩人の)マイダーノフは、出版されたばかりの自作の詩『殺戮者ころりくしや』を朗読し始めた。けれども、わたしは碌々ろくろく聞かなかった。わたしは絶えずジナイーダの顔を見つめながら、彼女の言った最後の言葉の意味を解こうと努めていた。

あるいは密ひそかに、恋を争う人(実は父親)がありて、
思いも寄らず汝なが(彼女の)胸をとりこにせしや？」

不意に(詩人の)マイダーノフが鼻声で叫んだ時に、わたしの目はジナイーダの目と出会った。彼女は視線を伏せて、かすかに顔を赤らめた。彼女が顔を赤らめたのに気づいて、わたしは思わず驚きに全身が冷たくなった。わたしはもう前から彼女に嫉妬していたが、この瞬間、彼女は恋をしているという想念(想い)が、稲妻いなずまのようにわたしの頭にひらめいた。「……ああ、どうしよう！ 彼女は恋におちているのだ！」

十、令嬢の恋の相手は誰かと思ひ悩む

わたしの本当の責苦せめく(苦しみ)は、その瞬間から始まったのである。わたしは頭が痛くなるほど考えつめたり、思案を重ねたり、考え直したりした。そして、できるだけ秘密を守りながら、絶え間なくジナイーダを観察していた。彼女には或る変化が生じた——それは明白であった。彼女は一人で散歩に出かけて、長い間さまよっていた。時によると、客に顔を見せないで、幾時間も幾時間も、自分の部屋に引き籠こもっていることがあった。以前は絶えてなかったのである。わたしは急に図抜けて洞察力しんさつりよくがついた——少なくともついたような気がした。「……あの男じゃないかしら？ それとも、ひよつとするとあの男じゃなかるうか？」と、心の中で彼女の崇拜者たちを一人一人あらためながら、わたしはこう自問するのであった。なかんずくマレーフスキイ伯爵はくしやくは、(こんなことを認めるのは、ジナイーダのために恥ずかしかったけれど)、ほかの誰よりも危険な人物として、内心ひそかに注目した。

この十六歳の洞察力は、極めてまだ未熟なものであり、もし崇拜者の中にとすれば、彼女がここまで悩み苦しむ必要は全くない。なぜなら、いつでも自分の思い通りになるからである。彼女は、こう言っている。「……わたし、こっちで上から見下ろさなくちゃならないような人は、好きになれないの。わたしの欲しいのは、向うでこっちを征服してくれるような人」であり、そのような人物に彼女は出逢ってしまったのである。

わたしの観察力は、自分の鼻の先までしか届かなかったし、わたしの秘密政策は、誰の目をも欺くことが出来なかつたらしい。少なくとも医師のルーシンは、すぐさまわたしの腹の底まで見抜いてしまった。もつとも、彼自身も近頃様子が変わった。痩せが目立って、やはりよく笑いはするけれど、その声が妙にこもって、毒々しくぶつきら棒に響いた……以前の軽い皮肉と、ことさらとつてつけた露骨な話ぶりは、自ら意識せざる神経的ないら

だたしい調子に代わってしまった。「……ねえ、君、何だって君はそうしょっちゅう、ここへやって来るんです」と、ある日ザセーキン家の客間で、二人きりになった時、彼はわたしにこう言った。(公爵令嬢はまだ散歩から帰って来なかつたし、母夫人のがみがみ言う声は、中二階で響いていた。彼女は小間使と言ひ争っているのであつた)。「……君は若い間に勉強したり、仕事をしたりしなくちゃならんはずでしょう——いったい君は何をしているんです？」と言うので、「……僕が家で勉強してるかどうか、あなたには分からないでしょう」とわたしは言い返したが、その調子にはいくぶん尊大なところもあれば、いくぶんうろたえたところもあつた。

「……何が勉強なものですか？ 君の頭の中にあるのは、まるつきり違つたことなんですからね。だがまあ、わたしも敢えて言い張りますまい……君の年頃では、それが当たり前だから。しかし、君の選択は、きつい失敗ですよ。この家がどんな家か、君には分からないんですか？」と言うので、「……何のことだか、分かりませんね」と、わたしは答えた。「……分からないって？ それじゃますますいけない。わたしは義務として、君に注意しておきますがね、われわれみたいな年寄りの独身者なら、ここへやって来たつてかまいません。われわれはびくともすることじゃないですよ。なにしろ揉まれ抜いた人間だから、矢でも鉄砲でも持つてこいでさあ、ところが、君はまだ皮が柔らかいから、この空気が毒ですよ——まあ、わたしの言うことを信じてください。伝染するかも知れませんよ」と言うのであつた。

そこで、「……どうしてですか？」と聞くと、「……どうもこうもありません。いったい君はいま健康ですか？ ノーマルな状態でいますか？ 君がいま感じていることは——一体そんなことが君のためになりますか、いいことですか？」と言うので、「……僕が何を感じてると言うんです？」と、わたしは言つたが、心の中では、医師の言う通りだと思つた。「……いやいや、君は若い、まだ若い」と、わたしにとつて何か非常に侮蔑的なものが、この言葉の中に含まれているかのように、医師は意味ありげな表情をして、言葉を続けた。「……ごまかそうたつて駄目ですよ。君の心にあることは、ちゃんと顔に書いてありますよ、ありがたいことにね。だが、こんな話をしたつて仕方がない。第一この僕にしたつて、こんな所へ来るはずはないんですよ(もしわたしが君と同じくらいな変人でなかつたならば)、ただ一つ不思議なことは——どうして君のような頭の賢い人が、自分の鼻先で起つていることに気がつかないんでしょう？」と言うので、「……というのと、どんなことが起つているんです」と、わたしは素早く相手を受けて、全身の注意を緊張させた。

医師は、妙に嘲るような同情の色を浮かべて、じつとわたしを見つめた。「……だが、わたしだつてほめたものじゃない」と彼は、独り言のように言つた。「……この人にそんなことを言う必要がどこにあるんだ。一口で言えば」と、そこで彼は声を高めて、「……繰り返して言いますが、この雰囲気は君のためになりません。そりや、ここはおもしろい。しかし世の中は様々ですからね？ なるほど、温室の中は気持ちのいい匂いがしている——しかし、その中で暮らすわけにはゆかんですからね！ わたしの言うことを聞いて、またカイダーノフ先生のところにお帰りなさい」と言うのであつた。

公爵夫人が這入つて来て、歯が痛いと言者に訴えはじめた。やがてジナイーダもやつて来たので、夫人は、「……ねえドクトル、この子を叱つてやっつけて下さいな。一日じゅう、氷水ばかり飲んでるんですよ。それが体にいいことでしょうかねえ、あんな弱い胸をし

ている癖に」と言うので、「……なぜそんなことをなさるんです？」とルーシンが尋ねると、「……そうしたら一体どうなるんですの？」と聞き返すので、「……どうなるかですって？ 風邪をひいて死ぬかも知れませんよ」と言うので、「……ほんとう？ まあ？ でも、かまやしない——それでけっこうだわ！」と言うので、「……おやおや！」と医師はつぶやくとともに、公爵夫人は出て行ってしまおうのである。

さて、ここで不思議に思うのは、母親が、「……ねえドクトル、この子を叱ってやっ下さいな。一日じゆう、氷水ばかり飲んでるんですよ。それが体にいいことでしょうかねえ、あんな弱い胸をしている癖に」と言っている。この「……あんな弱い胸をしている癖に」ということは、一体、何を意味するかと問えば、それは、当然、彼女の身体は、完全なる「健康体」ではなく、何らかの「病氣」(持病)を患っていて、しかもそれは「胸」か(或いは「心臓」ということになるのだろう)。

そこで、「……なぜそんなことをなさるんです？」と医師のルーシンが尋ねると、「……そうしたら一体どうなるんですの？」と聞き返すので、「……どうなるかですって？ 風邪をひいて死ぬかも知れませんよ」と言うのである。まず、「……どうなるかですって？」という医師の驚き方が余りに尋常ではない。ふつう「……一日じゆう、氷水ばかり飲んでいたらと言つて、それで風邪をひいて死ぬかも知れない」など聞いたことがない。だとすれば、彼女の「病氣」(持病)はかなり重病と見なければならぬ。しかも、医師の言葉を聞いて、「……ほんとう？ まあ？ でも、かまやしない——それでけっこうだわ！」と言うのである。これはもうかなり「長いこと患っている」からこそ、出て来る言葉であり、医師も「……おやおや！」とつぶやくばかりであり、公爵夫人は出て行ってしまおうのである。

すると、「……おやおや」と、ジナイダは口真似をして、「……いつたい生きるってことは、そんなにおもしろいものですか？ まあ、まわり(私の身のまわり)を見てごらんさい……どうでしょう——これで(生きるって)いいんですの？ それともあなたは、わたしには分からない、感の鈍い女だと思つてらっしゃるの？ (これは自分の病氣や家のことなど何も知らないでも思つていらつしやるのと言いたいのである)。わたしはね、氷の入った水を飲むと、いい気持なんです。……たったそんな一瞬の満足のために、この人生を犠牲にするのは間違っている、などとまじめな顔をしてお説教なさるのは、それはあなたの御勝手ですけれどもね——」と言うと、「……まあ、その」とルーシンは言った。「……気まぐれとわがまま、……この二語であなたの全部は尽きていますよ。あなたの性格はこの二つの言葉にことごとく含まれています」と言うのであった。

ジナイダは、神経質に笑い出した。「……お気の毒さま、一足遅れましたよ、親切なドクトル。あなたの観察はあまり確かじゃありませんね。少し歩調が遅れてらっしゃるわ。——まあ、眼鏡でもおかけなさい。わたしいま気まぐれどころじゃないんです。あなた方からなかったり、自分でもばかを尽くしたり……そんなことの何がおもしろいものですか！ (自分は「今は恋に深く落ちて悩み苦しんでいるのよ」と言いたいのである)。「……自分勝手だとおっしゃるけれど……ね、ヴォルデマルさん」と、彼女は急にわたしの方へ向いて、とんと足を踏み鳴らした。「……そんな悲しそうな顔をしないでちょうだい。わたしは人から同情されるのが大嫌いなんだから」と言つて、彼女は足早に出て行った。

「……毒ですよ、こここの雰囲気は君には毒ですよ」と、ルーシンはもう一度、わたしにそ

う言うのであった。(ここで初めて彼女の身体は全くの健康体ではなく、実は胸か心臓に病気を患っていることが読者にはっきりと知らされるとともに、また、医師のルーシンという人は、この家の事情のすべてを熟知している人物でもあるのである。)

十一、令嬢が一つの「劇詩」をつくる

その晩、隣りのザセーキン家にはいつもの常連が集まった。わたしもその中にいた。会話がマイダーノフの例の『劇詩』のことに及ぶと、ジナイーダは心からそれを正直に褒めた。「……でも、どんなものでしょう？」と、彼女はマイダーノフに言った。「……もしわたしが詩人だったら、もっと違った主題を選ぶと思いますわ。こんなことは馬鹿々々しい話かも知れませんが、でもわたし時々妙な考えが頭に浮かぶんです。ことに夜明け前、空が薔薇色やねずみ色になって来る時分、目がさめて寝られないような時など、ことにそうですわ——彼女は、胸の上に両手を組んで、わきの方へ目をじつと注ぎながら、思い浮かぶ「劇詩」を話し始めるのであった。

それは、大きく二つに分かれていて、一方は、「……若い娘が大勢、夜中に大きな舟に乗って静かな川の上に浮んでいる。月は冴えわたり、娘たちは、みんな白い着物を着て、白い花の冠をかぶって、みんなで歌っているの。そうね、何か聖歌のようなものを」と言うのである。これは、まさに「乙女」(処女たち)ということになるかと思う。そして、もう一方は、「……不意に岸の上で、騒々しい物音や、高い笑い声や、炬火のはぜる音や、太鼓の響きが聞こえる。それは酒神の巫女が群れを作って、歌ったり叫んだりしながら、走って来るんですの」、「……酒神の巫女たちは、舟の中の娘たちを自分の方へ呼ぶと、娘たちは賛美歌を歌うのをやめてしまう。続けて歌うことが出来なくなっただけです。身動きもせずじっとしていると、水の流れば舟を岸の方へ押して行く。すると、不意にその中の一人が月光の中で静かに立ち上がると、ほかの乙女たちはびっくりしてしまいが、その娘が舟ばたをまたぐと、酒神の使い巫女たちは、彼女を取り巻いて夜の闇の中へ連れて行ってしまふ。その時、煙が大きく渦まいて、何もかも入り乱れて覆い隠してしまう。ただ、みんなの甲高い叫び声が聞こえるばかりで、岸の上には娘の花輪がとり残されている」という話である。

まず、「酒神」という言葉であるが、これはもちろん、「古代ギリシア神話」の中の「ディオニュソス」や「古代ローマ神話」の中の「バックス」のことであり、まさに「酒の神」ということになるが、ここでは、むしろ「恋愛や享楽や酒」の神であり、岸の上では、騒々しい物音や、高い笑い声や、炬火のはぜる音、太鼓の響きなどが聞こえて来る。それは、酒神の使いの巫女たちが群れを作って、歌ったり踊ったり叫んだりしながら、大きな舟の中にいる若い「乙女」(処女たち)を自分の方へと(恋愛や享楽や酒の森)へと誘い込んでいるのである。すると、その若い「乙女」(処女たち)の中の一人は、その誘惑に誘われて、岸に上がると、酒神の使いの巫女たちは、彼女を取り巻いて夜の闇の中へ連れて行ってしまふ。その時、煙が大きく渦まいて、何もかも入り乱れて覆い隠してしまう。ただ、みんな(乙女たち)の甲高い叫び声が聞こえるばかりで、岸の上には娘の花輪(乙女の象徴)がとり残されている。……やがて、また一人と、その誘惑に誘われて、「恋愛や享楽や酒の森」へと這入って行くことになるのだろうか。

ジナイーダは口をつぐんだ。「……ああ、彼女は恋に落ちたのだ」と、わたしはまた考
えた。「……それだけですか？」と、詩人のマイダーノフが聞いた。「……それだけよ」
と、彼女は答えた。「……それは大きな劇詩の題材にはなりかねますが」と彼は勿体ぶっ
てこう言った。「……しかし、叙情詩の材料として、あなたの想を頂くとしましょう」と
言う。「……浪漫的なものですね？」と、伯爵のマレーフスキイが聞くと、「……むろん、
浪漫的なものです。バイロン風のね」と詩人は言う。「……僕の考えでは、ユーゴーの方
がバイロンよりいいですよ」と、若い伯爵は無造作に言い、「……面白い点でも上です」
と言う。「……ユーゴーは第一流の作家です」と、詩人のマイダーノフは答えた。「……
まあ、あなた方はまた、古典主義や浪漫主義の議論を始めるんですの」と、ジナイーダは
そう言つて、「……それよりも、何かして遊びましょう？」と言うのであった。

すると、「……賭けですか？」と、医師のルーシンが受けた。「……いえ、賭けは退屈
よ。比べごつこがいいわ」と言うのであった。この「遊び」は、ジナイーダが自分で考え
出したものであり、何か一つ物を決めておいて、みんなでそれに似た何か別のものを考え
る。そして、一番いい比喻を考え出した者が、賞（褒美）をもらうのである。

彼女は窓へ近よつた。太陽はたつた今沈んだばかりで、空にはまっ赤な長い横雲が高く
浮かんでいた。「……あの雲は何に似ているでしょう？」とジナイーダは尋ねた。そして
わたしたちの答えも待たずに自分でこう答えた。「……わたしあの雲は、クレオパトラが
アントニーを出迎えるに乗つて行つた、金の船に張つてある真紅の帆に似てると思うわ。ね
え、詩人のマイダーノフさん、あなたこの間わたしにその話をなすつたでしょう」と言う
のであった。わたしたちはみんな『ハムレット』の中のポーニアスよろしく、（これは
ハムレットがああ雲はラクダに似ていると言うと、ポーニアスは、確かにラクダに似て
ますねと追従するのであり）、あの雲はまったくその時の帆に似ている、それ以上の比喩
は誰ひとり考えつけない、と決めてしまった。すると、「……その時、アントニーは幾つ
だったでしょう？」と、ジナイーダが聞いた。「……そりや、きつと若かつたに相違あり
ません」と、マレーフスキイ伯爵が口を入れた。「……そう、若かつたですな」と、自信
たつぷりで詩人のマイダーノフが裏書きをした。ところが、「……失礼ですが」と、医師
のルーシンが大きな声を出した。「……アントニーはもう四十を越していましたよ」と言
うので、「……四十を越して？」と、ちらと彼を見やりながら、ジナイーダはくり返した。
わたしは、まもなく家に帰つた。「……彼女は恋に落ちた」と、わたしの唇はささや
いた。「……だが、いったい誰と？」と思うのであった。

十二、ジナイーダの変容ぶりに驚く

日が流れ去つた。ジナイーダはいよいよ奇妙に、いよいよ不可思議になつて行つた。あ
る時、わたしが彼女の部屋へ入つて行くと、彼女は籐椅子にかけて、とがったテーブルの
縁に頭を押しつけていた。はつと彼女は身を起したが……その顔はいちめん涙にぬれてい
た。「……あら、あなただつたの？」と、彼女は残忍な微笑を浮かべながら言った。「……
……こつちへいらつしゃい」と言うので、わたしはそばへ寄つた。すると、彼女はわたしの
頭へ手を載せたかと思うと、いきなり髪の毛を引っつかんでねじ回し始めた。「……痛

「い！」と、わたしがこう言うと、「……あら！ 痛いんですって、じゃわたしは痛くない
と思つて？ 痛くないって思つて？」と彼女はそう言いながら、わたしの頭から一ふさの
毛を引きむしってしまう。すると、「……あつ！」と、彼女は不意に叫んだ。「……わた
しまあ、何をしたんだろう、可哀そうなヴォルデマールさん！」と言ひ、彼女は、むしり
取った髪の毛を丁寧（ていねい）にそろえると、自分の指に巻きつけて、小つちな輪に編んだ。そして、
「……わたし、あなたの髪の毛をロケットに入れて、いつも身につけているわね」と言う
のであった。

それでは、なぜジナイダの「心の中」は、そのように「荒れ狂っている」のかと問え
ば、それはもちろん、父親との関係が「うまく行つてない」からであり、その「憂さ晴ら
し」のように、例えば、前述のようないきなり髪の毛を引つつかんでねじ回したり、また、
ある時は、「……あなたは終始、わたしを愛しているとおっしゃるけど、もしほんとうに
愛してらっしゃるなら、わたしのそばへ——この往来へ飛び降りてごらんなさい」と言う
のであった。わたしは、ジナイダが、終りまで言い切らぬうちに、誰かに後ろから突か
れたように、早くも塀（へい）から飛び降りてしまった。その塀の高さは三、四メートルほどあつ
た。すると、彼女はびっくりして、「……どうしてあなたはこんなことができたの、どう
してわたしの言うことなんか聞いたの……だつて、わたしもあんたを愛してるんじゃない
の……さあ、お起きなさい」と言うのであった。

彼女の胸は、わたしの胸のすぐそばで呼吸し、その手はわたしの頭に触れていた。する
と、不意に——ああ、わたしはその時どんな気持ちでしたか！ 彼女の柔らかな唇（くちびる）が、わ
たしの顔一面をキスでおおい始めたのだ。……やがてわたしの唇にも触れた。……だが、
その時ジナイダは、わたしの顔の表情からみて、目こそ開けないでいるけれど、わたし
が意識を回復したのを察したのでろう、急に身を起こしてこう言った。「……さあ、起き
なさい。何だつてこんな埃（ほり）の中（なか）にいつまでも寝てるの？」と言うのであった。

一方、わたしは道の真（ま）ん中（なか）にかがんでしまった。足は言うことをきかず、背中はずきず
きと痛み、頭は眩暈（めまい）がしていたが、わたしがその経験した幸福感は、もう二度とわたしの
生涯に繰り返されなかつた。だが、それは、いかにも「……わたしはまだねんねだつた」
というように回想しているのである。

十三、ジナイダはおとなしい馬を欲しがる

さて、この章で大事なものは、ジナイダが「おとなしい馬」を欲しがっているというこ
とであり、本文では、軽騎兵（けいきへい）のペロヴゾーロフが入つて来て、「……実は、あなたの御用
に役立つようなおとなしい馬が、まだ見つかりませんでした」と言ひ、また、「……あな
たは、馬の心得（こころえ）がないじゃないですか。万（ばん）一（いち）どんなことがあるとも限りませんよ！ それ
にまた急にえらいことを考え出したもんですねえ」と言うのであった。

「……ええ、そんなことはわたしの勝手ですわ、そういうわけでしたら、ピョートル・
ヴァシーリツチにお願いしましょう」（……これは主人公の父親の名前であり、わたしは
不思議なことに思つた。彼女は父の好意を信じきっているように、やすやすと自由に父の
名を口にするではないか）、「……そうですか」と、ペロヴゾーロフは言った。「……じゃ、
あなたはあの人と一緒に遠乗りをするおつもりですか？」と言うので、「……あの人と行

くか、ほかの人と行くか——そんなことはあなたにとって同じじゃありませんか。ただあなたと一緒にありませんよ」、「……僕と一緒にでない」と、ベロヴゾーフは繰り返した。「……どうぞ御随意に。いたし方がありません。とにかく僕は馬を手に入れて差し上げますよ」と言うと、「……ただね、へんてこな牛みたいなものを連れて来ちゃいやですよ。わたしうんと駆けたいんですから」、「……いやなに、駆けられますよ……しかし、全体お連れは誰ですか、マレーフスキイですか？」と聞くと、「……おや、あの人と一緒に行ったって、差し仕えないじゃありませんか、まあ、安心おしなさい」と彼女は言い足した。「……そんなに目を光らせないでちょうだい。わたしあなたも連れてってあげますわ。あなただつてご存知でしょう。今わたしにとってマレーフスキイなんか——ぴ、ぴ、ぴいだわ！」と、彼女は頭を振ったとある。

さて、この軽騎兵のベロヴゾーフという人は、「……彼女（ジナイーダ）のためなら、喜んで火の中へでも飛び込みかねなかった。自分の知力やその他の才能に自信を持ってない彼は、絶えず彼女に結婚を申し込んで、ほかの男たちの言っているのは、所詮は空念仏（口先だけ）に過ぎないと、ほのめかすのであった」。そのような彼にとって、ジナイーダがおとなしい馬を欲しがり遠乗りするとなれば、「……その相手は誰か？」と気になって気になってしょうがないとともに、その相手にもういさよ嫉妬心を燃やすことになるが、自分がその「遠乗り相手ではない」と聞かされて、もの凄く落ち込みながらも、「……いたし方がありません。とにかく僕は馬を手に入れて差し上げますよ」と言うので、「……そんなに目を光らせないでちょうだい。わたしあなたも連れてってあげますわ。あなただつてご存知でしょう。今わたしにとってマレーフスキイなんか——ぴ、ぴ、ぴいだわ！」と言うのである。つまり、彼女（ジナイーダ）の「頭の中」には、もう「主人公の父親」のことしかないということである。

十四、父とジナイーダの乗馬姿を見かける

あくる朝、わたしは早く起きて、城門の外へ出て行った。ちよつと散歩をして、悲しみを紛らしてやろう、という気持なのであった。わたしは長いこと山や森を歩き回った。自分を不仕合わせ者と感じたので、思うさま憂愁にひたるつもりで、家を出たのであるが——しかし、青春とうらかな日和とさわやかな空気と、急がしい足の運びがもたらす心地よさと、厚い草の茵に静かに身を横たえる甘いものうさと——こういうものが結局、勝ちを占めた。かの忘れ難い言葉や接吻の想い出が、再びわたしの心をいっぱい満たして来た。ジナイーダは何と言つても、わたしの断固たる精神や、英雄的行為を正當に評価しないわけには行かない、そう考えるとわたしの愉快であった。「……あの人の目には、ほかの者の方が優れて見えるのかも知れない」と、わたしは考えた。「……なあに、かまうもんか！ その代わり、彼らはただそれと云うだけだが、自分はちゃんとやってのけたのだ！ それにあの人のためなら、まだまだあれくらいのことじゃない、もつともつと偉いことをしてみせる！」と思うのであった。（これは、当時の作者の心模様を描いていることになるのだらう。）

わたしの想像力は活動を始めた。わたしは自分が彼女を敵の手から奪う光景や、血まみれになって牢屋から彼女を救い出す有様や、ついに彼女の足もとで死ぬる場面などを、次

々に心に描き始めた。わたしは家の客間にかかっている絵を思い出した。それは、マレク・アデル（馬の名）がマチルデを乗せて走る場面を思い出した。（若い時には、誰もが多少かれ少なかれ、《荒唐無稽な自分に都合のいい》実に様々な「空想や想像或いは妄想」などに耽入（たふし）ることが多いのかも知れない。）

そのうちに食事の時刻が来た。わたしは谷へ下りて行った。狭い砂の道がその間をうねって、町の方へ続いていった。わたしは小道を伝わって歩き出した。……ふと、馬の蹄（ひづめ）のこもったような響きが、うしろの方に聞こえた。わたしはあとをふり返ると、思わず立ち止まって帽子を取った。父とジナイーダの姿が目に入ったのである。二人は馬を並べて進んでいた。父は全身を彼女の方へかがめ、片手を馬の首に突っ張りながら、なにやらしきりに話していた。父は微笑を含んでいた。ジナイーダは、きびしい表情で目を伏せて、じつと唇を噛みしめたまま、黙って彼の言葉を聞いていた。（これは彼女が馬を走らせ過ぎたのかも知れない）。わたしが初め目にしたのは、この二人きりだったが、しばらく経って、谷の曲り角から、軽騎兵（けいきへい）の制服を着て外套（がいとう）を持ち、泡をふいた黒馬にまたがったペロヴゾーロフの姿が現われた。駿馬（しゅんま）らしい馬は首を振り振り、鼻息を立てて、踊りはねている。乗り手は、手綱をおさえたり拍車を当てたりしている。わたしはわきへよけた。父は手綱（たづな）をしめて、ジナイーダから身を離し、彼女は静かに目を上げて父を見た。——こうして二人は駆け去った。……ペロヴゾーロフは、サーベルをがちやがちや鳴らしながら、二人のあとを追った。「……あの男は蝦（えび）みたいにまっ赤だ」とわたしは考えた。「……それにひきかえ、なぜ彼女はあんなに青い顔をしているのだろうか？ 午前中乗りまわしているのに——あんな青い顔をしているなんてと？」と思うのであった。（これはやはり、彼女の肺か心臓に何らかの疾患があるということになるのだろうか。）

わたしは歩みを早めて、かつきり食事の前に家へ帰り着いた。父はもう服を改め、顔を洗ったあとのさっぱりした様子で母の肘掛椅子（ひじかけいす）のそばに腰を落ちつけ、持ち前のなだらかな響（ひび）きのいい声で、『討論新聞ジュルナル・デ・デパ』の雑録欄（ざつろくらん）を読んで聞かせていた。けれども母の方は、いっこう身を入れずに聞いていて、わたしの顔を見るが早いか、どこに終日姿（いちじち）を隠していたのかと聞いた後（あと）、得（え）体の知れない人間と、どこかわけのわからない所をほつつきまわるのは大きらいだ、とつけ足した。（これは夫への当てつけにもなるのだろうか）。わたしは一人で散歩していたのだと、答えようと思ったが、ふと父の顔を見ると、なぜか口をつぐんでしまった。

十五、ひさしぶりにジナイーダと会話する

それから五、六日の間、わたしはほとんどジナイーダを見なかった。彼女は病気とふれだしていたが、それでも離家（はなれ）の常連（じょうれん）が——彼女の言葉を借りて言う——当直（とうちき）にやってくるのを妨げなかった。ただ詩人のマイダーノフだけは例外で、彼は感激する機会がなくなると同時に、たちまち意気消沈（いげしおせん）して退屈（たいくつ）そうなふうになった。軽騎兵（けいきへい）のペロヴゾーロフは、軍服のボタンをきちんと掛けて、真っ赤な顔をしながら、気むずかしそうに片隅（かたぐも）にすわっているし、マレーフスキイ伯爵（はくしやく）の華奢（みやび）な顔には、いつも何だか不気味な微笑が漂（よ）っていた。彼は今やほんとうにジナイーダの寵（ちよう）を失ったので、今では特別勉強（とくべつべんきやう）して老夫（らふじん）の御機嫌（ごきげん）を取り始め、彼女と一緒に貸し馬車（かしてばしや）で、モスクワ総督（そうとく）の所へ出掛けて行ったことさえ

ある。もつとも、この訪問は不成功に終わった。

医師のルーシンは、毎日二度ずつやって来たけれど、長く座すわつてもいかなかった。わたしは最近彼と言ひ合つて以来、多少この人を恐れるようになったが、同時に、真底から彼に惹きつけられるような気がした。ある時、彼はわたしと一緒にネスクーチヌイ公園へ散歩に出かけたが、彼は恐ろしく人がよくて親切で、いろんな草や花の名前や性質を説明してくれたが、不意に何の切っ掛けもなく藪やぶから棒ぼうに、ぼんと額ひたいを叩いて「こう叫んだ。「……ああ、おれは馬鹿だった。あの人を弄媚コケツト女だと思ひ込んでいたんだからな？ どうやら人によつては——自分を犠牲にするということが、気持のいいものと見える」と言うので、「……それは一体何のことですか？」とわたしは尋ねた。「……いや、君には何も言いたくないです」とルーシンはぶっきら棒に答えるのであった。（この彼の言葉を、やがて主人公は、その目で目撃することになるのである。）

ジナイーダは、わたしを避けるようにしていた。（それは父との関係がその息子に知られることを、密かに恐れているのかも知れない）。わたしの姿を見ると——それはわたしも気づかずにいられたが——不快な印象を受けるらしかった。彼女は無意識にわたしから顔をそむけた……全く無意識なのである。それがわたしにはつらかった。それがわたしに断腸の思ひをさせるのであった。けれど、どうにも仕方がない。わたしは彼女の目に入らないように努めながら、ただ遠方からそれとなしに見張りをしていたが、それも常に必ず成功するとは行かなかつた。彼女には依然として、何か不思議な変化が起こつていた。顔がすっかり違つてしまい、全体に別人のようになって来た。

なかでも、彼女に生じた変化のなかで格別わたしを驚かせたのは、ある静かな暖かい黄昏たそがれのことであつた。わたしは、枝をひろげた接骨木ニワトコの木陰で、低いベンチの上に腰かけていた。わたしはこの場所が好きだつた。そこからジナイーダの部屋の窓が見えたからである。わたしはじつとすわつたまま窓を眺めながら、今に開きはしないかと心待ちにしていた。すると、はたして窓があいて、ジナイーダが姿を現わした。彼女は着物を着ていたが、その顔も、肩も、手も、まっ白に見えるほど青ざめていた。彼女は長い間じつとそのまま、ひそめた眉の下から、じつとまっすぐ前を長いこと見つめていた。わたしは今まで、彼女のこんな目つきを見たことがなかつた。やがて、彼女は両手を堅く握りしめて、それを唇や額へ持つて行つた。すると、不意に指を広げて、耳の上から髪を払いのけ、さつと一振りふり上げた。そして、何か決心がついたかのような決然たる態度で、頭を上から下へ大きくうなずかせて、ぱたりと窓を閉めるのであった。

三日ばかりして、庭で彼女に出会つた。わたしはわきの方へ避けようとしたが、彼女の方からそれを引き止めた。「……手を貸してちょうだい」と、以前の優しい調子で、彼女はわたしに声をかけた。「……もう長い間おしゃべりをしなかつたわね」と言う。わたしは彼女の顔をうかがつた。その目は静かに光つて、顔はまるで靄もやを通して見るように微笑ほほえんでいた。「……やつぱり加減がよくなりましたか？」と、わたしは聞いた。「……いいえ、今はもうすっかりよくなりましたわ」と彼女は答えて、小さな紅あかいばらを一輪摘み取つた。「……ただ少し疲れてるけど、それも今によくありませんよ」と言うのであった。

*

*

そして、この章で最も大事なところは、次の、主人公が「……あなたは僕に愛されるのがいやなんです……そうなんですよ！」と、わたしは思はず陰鬱いんうつな激昂した調子で叫んだ。

「……いいえ、愛してちょうだい。けれど、前のようにはなしにね」と言うのであった。「……と言うと？」と聞くと、「……友だちになりましたよ——それでなくちゃいけないわ！」とジナイダは、わたしにばらの花を嗅がせた。「……ねえ、わたしはあなたよりずっと年上なのだから——あなたの叔母さんになってもいいくらいだわ、まったく、まあ叔母さんでないまでも、姉さんは間違いのないところよ。ところが、あなたは……」と言うので、「……僕はあなたの目から見れば子供なんです」と、わたしは遮った。「……ええ、そう、子供よ。だけど、かわいい利口ない子で、わたし大好きなの。ああ、こうしましように！ わたし今日からあなたをわたしの小姓に取り立ててあげるわ。よくって、お小姓というものは、御主人のそばを離れてはいけないということを、忘れないでちょうだい。さあ、これがあなたの新しい位のしるしよ」と、わたしの短いジャケットのボタン穴にばらをさしながら、彼女はこう言い足した。

つまり、彼女（ジナイダ）にとって主人公というのは、いわば「父親の息子さん」ということで特別に親しくしてきたが、しかし、それは、決して「恋愛対象」としてではなかったのである。ところが、主人公は、彼女（ジナイダ）をまさに「恋愛対象」として見ているのである。——このまいつまでも主人公の気持ちをあれこれ弄ぶわけにはいかないし、また、この「問題」は、遅かれ早かれ、どこかで決着を付けなければならぬとそう決心して、今、こうしてはっきりと明言しているのである。

やがて、彼女は急にそっぽを向いて、「……さあ、お小姓さん、わたしのあとからついてらっしゃい」と言い、ずんずん離家の方へ歩き出した。わたしはそのあとに続いたが、心中絶えず不審に思った。「……いったい」と、わたしは考えた。「……このつつましい分別のある令嬢が、以前のジナイダと同じ人かしら？」と、彼女の歩きぶりまでが前より静かになったように思われた。そして、彼女の姿全体もひととき品位を増して、一層すらりとして来たように感じられた。そして、「……ああ！ この時わたしの心中に、どんな新しい力をもつて、愛が燃え立ったことか！」と思うのであった。

それでは、彼女（ジナイダ）は、いったい何を切っ掛けとして大きく変化したのだろうか？ それは、言うまでもなく、主人公の「父親との恋愛」によってであるが、以前、医師のルーシンは、「……気まぐれとわがまま、……この二語であなたの全部は尽きていますよ。あなたの性格はこの二つの言葉にことごとく含まれています」と言い、今まではそういう傾向の強い女性であったのである。ところが、今は、ジナイダは、神経質に笑い出して、「……お気の毒さま、一足遅れましたよ、親切なドクトル。あなたの観察はあまり確かじゃありませんね。少し歩調が遅れてらっしゃるわ。——まあ、眼鏡でもおかけなさい。わたしいま気まぐれどころじゃないんですの。あなた方をからかったり、自分でもばかを尽くしたり……そんなことの何がおもしろいものですか！（自分は「今は恋に深く落ちて悩み苦しんでいるのよ」と言いたいのである）。そして、この「今は恋に深く落ちて悩み苦しんでいる」ことによつてこそ、今までの「気まぐれとわがまま」な女性から、「……このつつましい分別のある令嬢が、以前のジナイダと同じ人かしら？」と、彼女の歩きぶりまでが前より静かになったように思われた。そして、彼女の姿全体もひととき品位を増して、一層すらりとして来たように感じられた。そして、「……ああ！ この時わたしの心中に、どんな新しい力をもつて、愛が燃え立ったことか！」となるのである。

十六、令嬢の若い女王主催の舞踏会の話

夕食の後で、また常連が離家に集まって、令嬢もその席へ姿を現わした。一座は、わたしにとつて忘れることの出来ないあの初めての晩と同じように、すっかり顔ぶれがそろった。予備大尉のニルマーツキイまでが、このこやつて来ていた。詩人のマイダーノフは、その晩は誰よりも真つ先に出席した——新しい詩を持って来たのである。そして、また賭けごとの遊びが始まったけれど、もう前のように突飛な思いつきや、馬鹿ふざけや、騒々しさがなくなつて——ジブシーめいた要素は消え失せていた。

さて、この章は、まず最初、彼女は、籤に当たった人が「夢の話」をするように提案しますが、それはうまく行かず、さっぱり面白くなかつたとある。次に、「……みんな何か作り話をするにしましょう。自分で考えた話でなくちや駄目よ」と言うのであるが、まず第一に話をする番に当たつたのは、またもや若い軽騎兵のペロヴゾーロフであり、彼は、「……僕は何も考え出すことが出来ません！」と叫ぶので、「……なんてつまらないことを！」とジナイーダは呆れてしまうのである。そして、その次は、今度は彼女（ジナイーダ）自身が「作り話」をする番になるが、その話がこの「章」の最大の主要となるものであり、それを要約すると、次のようなものである。

「……まず、立派な宮殿を想像してください。夏の夜で、すばらしい舞踏会があるの。その舞踏会は、若い女王の主催で、どこもかしこも金だの、大理石だの、水晶だの、絹だの、灯だの、ダイヤモンドだの、そのほかありとあらゆるぜいたくな品々が、思う存分飾られている素晴らしい舞踏会なの。客が大勢集まつて、それがみんな若くて、美しく、勇ましくて、しかもみんな夢中になるほど女王に恋しているのです。そして、女王のまわり一同むらがつて、みんなありたけの知恵をしぼりながら、媚の言葉をふりまいていますが、女王はこういう言葉（ほめ言葉）を聞いたり、音楽に耳を傾けたりしながら、客の方は少しも見ようとしないんです。上から下まで——天井から床まである六つの窓があげ放されて、その外には、大粒の星の輝く暗い空と、大きな木の茂つた暗い庭が見えています。女王はじつと庭をながめているんです。そこには、木立のそばに噴水があつて、闇の中にも白く見ているのですが、それがひよろひよろ長く伸びて、まるで幻のように思われる。女王は人声や音楽の響きの間から、静かな水のせせらぎを聞きながら、見つめてこんなことを考えています。（そして、この「章」で最も大事なものは、次の内容である。）

皆さん、あなた方はみんな上品で、賢くて、それにお金持です。あなた方はわたしを取り巻きながら、わたしの一言一言に戦々競々として、誰も彼もわたしの足もとで、死にもしかねない勢いでいらつしやる。わたしはあなた方を支配しているのです……ところが、あすこの噴水のそばには、あのさらさらとなる水のそばには、わたしを愛している人が……わたしを支配している人が、たがずんでいるのです。その人はきらびやかな着物も着ていなければ、宝石も付けていません。誰もその人を知っている者はないのです。けれども、その人はわたしを待ち受けて、わたしの行くことを信じきっています——ええ、わたしは行きますとも。わたしがその人のところへ行きたいと思う時に、わたしを引き止める力はこの世にありません。わたしはその人と一緒にいるのです。その人と一緒に園のやみの中に、木立のさざめきのもとに、噴水のせせらぎの陰に姿を消すのです」とある。

つまり、「……あのさらさらとなる水のそばには、わたしを愛している人が……わたし

を支配している人が、たまたずんでいるのです。その人はわたしを待ち受けて、わたしの行くことを信じきっています——ええ、わたしは行きましても。わたしがその人のところへ行きたいと思う時に、わたしを引き止める力はこの世にありません。わたしはその人と一緒にいるのです。その人と一緒に園のやみの中に、木立のさざめきのもとに、噴水のせせらぎの陰に姿を消すのです。——それでは、その「相手」とは一体誰になるのかと問えば、それは、言うまでもなく、主人公の「父親」という展開になるのである。

一、今の話を常連たちはどう受け止めるか彼女自ら語る

ジナイーダが話し終えると、「……それは作り話ですか？」と伯爵のマレーフスキイが狡猾そうに尋ねた。ジナイーダはその方に一顧も与えなかった。「……だが諸君」と不意に医師のルーシンが言い出した。「……もしわれわれがその客人たちの中にいて、泉のほとりに隠れているその仕合わせ者のことを知ったら、一体どんなにしよう？」と聞くとき、「……待つてちょうだい、待つてちょうだい」と、ジナイーダは遮った。「……あなた方が一人一人どんなふうになさるか、わたし自分で言いますわ」と言うのであった。

さて、ここでは、五人の常連の性格などが、ジナイーダによって浮き彫りにされて行くことになるが、「……（軽騎兵の）ペロヴゾーロフさん、あなたはその男に決闘を申し込みなすつたでしょう。（詩人の）マイダーノフさん、あなたは、その男に当てつけた諷刺詩を書くわ。……でも、そうじゃないわ——あなたは諷刺詩が書けないから、バルビエ風の短長格の長詩でも作って、その力作を『電信雑誌（テレグラフ）』誌に発表なさるわ。それから、予備大尉のニルマーツキイさん、あなたはその人から、お金をお借りになる……いや、あべこべにお金を貸して、利息を取るわね。ところで、あなたは、ドクトル……」と彼女は言い淀んだ。「……そうねえ、あなたのことはわからないわ、あなたは何をなさるでしょう？」と聞くと、「……わたしは侍医の職務として」と医師のルーシンは答えた。「……女王をお諫め申します。お客どころでない状態の時に、舞踏会などをなすつてはいけません」と。「……なるほど、おっしゃる通りかも知れないわね。じゃ、伯爵、あなたは？」と聞くので、「……わたしですか？」と、例の気味の悪い微笑を浮かべながら応えると、「……あなたはその人に毒の入ったお菓子をすすめなさるでしょう」とジナイーダは、そう言うのであった。

すると、マレーフスキイの顔は、かすかに引きつって、一瞬間ユダヤ人のような表情を帯びたが、すぐ高笑いに紛らわしてしまった。「……さてそこで、ヴォルデマルさん、あなたはどうするかと言うと……」と、ジナイーダは続けたが、「……でも、もうたくさんだわ。何かほかのことをして遊びましょう」と言うとき、「……ヴォルデマル君は、お小姓の資格で、女王様が庭へ駆け出す時、その長い裳裾を捧げるでしょうな」と、毒々しい口調で伯爵のマレーフスキイが一矢をむくいた。

わたしはカツとなった。しかしジナイーダは、素早くわたしの肩に手を置くと、半ば身を起しながら、やや顫えを帯びた声で、こう言い放った。「……わたし、無礼な口をきく権利なんか、差上げた覚えはございません、伯爵。ですから、このまま御退席を願います」と、そう言って、ドアを指して見せた。すると、「……とんだことです。お嬢さん」と、マレーフスキイは呟いて、真っ青になってしまい、「……わたしは、誓って言います

が、こんなこととは思ひもかけなかったのです」「……わたしの言葉には、別にこれといったことも、ないようですし……第一、お気を悪くさせようなどという考えは、毛頭なかったのです。……許して下さい」と、マレーフスキイはそう言うのであった。

二、家に帰って寝床であれこれ考えを巡らす

わたしは長いあいだ寝つくことが出来なかった。ジナイーダのした物語は、わたしの心を打ったのだ。「……一体あの中に暗示が含まれていたのだろうか？」とわたしは自問した。「……そもそも誰を、そして何を暗示したのだろうか？ それにしても、暗示すべき事がちやんとあるとすれば……思い切って言い出すことが出来るものだろうか？ いや、いや、そんなことのあるはずがない」と、わたしは火照った頬を代る枕へあてて寝返りしながら、わたしはひとりささやいた……けれどわたしは、あの話をしている時のジナイーダの表情を思い出し……それから、ネスクーチヌイ公園で医師のルーシンが思わず発したあの叫び声や、彼女のわたしに対する態度が急に変わったことまでも思い出して……想像の糸口をなくしてしまった。「……その男は誰か？」これだけの言葉が、闇のなかにくつきりと印されて、わたしの目の前に立っていた。

近頃になってわたしは、いろんなことに慣れもしたし、ことに隣りのザセーキン家では、さんざんいろんなことを見せつけられた——不規則な生活、安ロウソクの燃えさし、こわれたナイフやフォーク、陰気くさいヴォニファーチイ、だらしのない恰好をした小間使い、当の公爵夫人の立居振舞い——こうした奇妙な生活は、もはや私を驚かさなくなつた。だが、今おぼろげながら感じられるジナイーダの変化——これだけにはわたしも慣れることが出来なかった。「……男たらし」と、ある時、母が彼女のことをこう言った。（この時には、母は漠然と二人の關係に感じていたのだろうか？）、「……男たらし」——それはわたしの偶像ではないか、わたしの神ではないか！ この一語が心を焼きつけるような気がしたので、わたしはそれをのがれるように枕に顔を埋めて、憤りの念に燃えたつた。それと同時に、もしあの噴水のそばの仕合わせ者になれるなら、わたしはどんなことでも辞さなかつたに相違ない、いかなる犠牲をも払つたに相違ない。

三、夜中、庭に出てまわりを歩きまわってみる

血潮がわたしの内部で燃え狂つた。「庭……噴水……」と、わたしは考えた。「……よし、ひとつ庭へ出てみようか」と、わたしは手早く着物をたて、家をすべり出た。——まつぐらの夜で、木々はようやくそれと聞こえるほどのささやきを立て、空からは静かな冷氣が降りて来て、茴香の香りが漂っていた。わたしはありたけの並木道を歩き尽くした。自分の足音の軽い響きが、わたしを当惑させもすれば元気づけもした。わたしは時々立ち止って、何やら心待ちにしながら、心臓がどきどきと早鐘のように鼓動するのを聞いていた。ついに、わたしは垣根に近づいて、細い棒杭に身をもたせた。不意に——それともただそう思われたのだろうか？——それとも自分の心臓の鼓動だったのか？ 「……誰がこんな所にいるのだろうか？」とわたしは聞こえるか聞こえないかにつぶやいた。あ、また、あれは何だろう？ 押し殺した笑い声か？……それとも、木の葉のそよぎか……さも

なくば、耳のすぐそばでもらしたため息か？ わたしは恐ろしくなった……。

「……誰だ、そこにいるのは？」と、わたしはさらに低い声で繰り返した。空気は束の間流れ動いた。空には一筋火のような筋がきらめいた。星が流れたのだ。「ジナイーダ？」と、わたしは聞こうとしたが、言葉は唇に凍りついてしまった。突然、よく真夜中にあることだが、まわりのものがごとごとく深い沈黙におちて……木立の中の蟋蟀さえ、鳴く声を止めてしまった——ただどこかの窓が、がたりと言ったばかりである。わたしはしばらくじっとたたずんでいたが、やがて自分の部屋へ、冷たい寝床へ帰って行った。わたしは奇妙な興奮を感じた。まるで逢い引きに出かけて行って、——むなしく孤独にとり残され、他人の幸福のそばを通り過ぎたかのように。(この時には、まだはつきりとした「姿」を目撃することが出来なかったが、ただ「……押し殺した笑い声か」とあるので、《恐らく「ジナイーダ」だったかと思うが》、翌日の深夜には、或る「姿」をはつきりと目撃することになるのである。)

十七、夜中、庭である男の姿を見かける

翌日、わたしはジナイーダをほんのちらりと見ただけだった。彼女は母夫人と一緒に辻馬車に乗って、どこかへ出かけたのである。その代わり、わたしは医師のルーシンと伯爵のマレーフスキイに会った。もともと、ルーシンはわたしにろくすっぽ挨拶もしなかったが、若い伯爵は作り笑いをしながらさも親しげに話しかけた。総じて離家の訪問者の中で、彼一人だけはわたしの家へうまく取り入って、母のお気に入りだったのである。父は彼に好感を持たないで、失礼なほど慇懃な態度をとっていた。

「……ああ、小姓君」と、マレーフスキイは口を切った。「……君にお目にかかって、実にうれしいですよ。君のうるわしき女王様は何をしておられますかね？」と聞くので、彼のすがすがしい美しい顔も、わたしにはこの瞬間たまたまなくいやに思われた——しかも、その目つきが、ふざけたような軽蔑の色を浮かべていたので、わたしは返事をしなかつた。「……君はまだ腹を立ててるんですね？」と彼は言葉を続けた。「……そりゃ無理ですよ。だって君にコショウという名をつけたのは、僕じゃないんですからね、ところで、小姓なるものは、必ず女王のつきものじゃありませんか。しかし、失礼ながら注意しますが、君は自分の職務に怠慢なようですね」と言うので「……何のことです」と聞くと、「……小姓ってものは、始終女王様のそばを離れずにいるべきものです。小姓は女王様のなさることを、何でも知っていなくちやなりません。女王様の見張りさえしなくちやならない」と彼は声を低めてつけ足した。「昼も夜もね」と言うのであった。

「……それは、どういう意味です？」と聞くと、「……どういう意味？ 僕ははつきり言っているはずですがね。昼も——夜も、ですよ。昼間はまあ、何とかなるでしょう。昼間は明るくて人目が多いですからね。ところが、夜となると、とかく不幸が起こりやすいもんでしてね。だから、君も夜やすまないで、見張りをするように忠告しますよ。一生懸命に見張りをするんです。覚えていきますか——庭、夜、噴水のそば——こういう所で見張らなくちやなりません。すると、君も僕に感謝するでしょう」と言うのであった。

伯爵のマレーフスキイはからからと笑い、くるりとわたしに背を向けた。恐らく自分の言ったことに、格別の意味を与えたのではあるまい。彼はごまかしの名人という評判を

とつていて、仮装舞踏会などでも人を翻弄するのに妙を得ていた。それは彼の全存在に染み込んでいるほとんど無意識の虚偽性が、極めて有効に役立ったからである。彼はただわたしをからかおうと思つたに相違ない。けれども、その一言一言は激しい毒となつて、わたしの血管へ流れ込んだ。全身の血がかつとわたしの頭へのぼつた。「……ああ！ そうだったのか！」とわたしは腹の中で考えた。「……きのう庭の方へ引き寄せられるような気がしたのも、やっぱいいわくがあつたのだ！」、「……いやいや、そんなことがあつてたまるものか！」と、わたしは叫んで、われとわが胸を拳で打つた。もつとも、何があつてはたまらないのか？ 自分でもはつきりとはわからなかつたのである。

「……マレーフスキ自身も、庭においでなされるか」とわたしは考えた。(ほんとうに彼は口をすべらしたのかも知れない。彼はそのくらいのこととはしかねない鉄面皮な男だから)、「……それとも、誰かほかの者がやつて来るか？」(うちの庭の垣根は、ごく低かつたので、乗り越えるには何の苦勞もいらなかつた)。「……しかし、どちらにしても、僕の手にかかつたが最後、あまり結構な目にあひはしないぞ！ それが誰であれ、僕の目にふれないように気をつけるがいい……僕は世間の人間とあの裏切り者に(わたしはもう真つ正面から、彼女を裏切り者と呼んだのである)。——この僕だつて復讐ができるということを知らしてやる！」と思うのであつた。(これは、昨日は何となくであつたが、今日の深夜は、必ずその相手を見つけ出してやると一大決心をするのであつた。)

一、夜中、ある覚悟を以て庭へと出かける

わたしは、自分の部屋へ戻ると、デスクの引出しから、この間買ったばかりの、イギリス製のナイフを取り出して、その刃ざわりを試してみた。それから眉をひそめながら、凝り固まつた冷やかな決意をもつて、それをポケットの中へ隠した。まるで、そういうことをするのが奇異なことでもなければ、また今度が初めてでもない、と言つたような塩梅だつた。わたしの心臓は毒々しく張りきつて、石のように堅くなつてしまつた。わたしはずつと夜中頃まで眉を開きもしなければ、唇をゆるめようもしなかつた。そして、火のように熱くなつたナイフを、ポケットの中で握りしめた。もう前からあらかじめ、何か恐ろしいことに対する心構えをしながら、絶えずあちこち歩きまわつていた。この新しいかつて経験したことのない感覚は、すっかり私の心を捉え尽くして、愉快な気持ちさえ感じさせたので、感心のジナイダのことは、あまり考えないほどであつた。わたしの頭には、絶えずこんな句が浮かんでいた。

それは、「……アレーコ(主人公の名)、若きジプシー」。「……美しき若者よ、どこへ行くのだ？ 目を伏して眠れ！……」、「……なれ(汝)は全身血に染まつている！……：おお、なれ(汝)はそも何をしたのか？」、「……何もしてはいない！」、わたしはどんなに残忍な微笑を浮かべながら、この「……何もしてはいない！」(いや、するのだ！)を何度も繰り返したことだろう。(プーシキンの叙事詩『流浪の民』より)

父は家にいなかった。けれど、近頃ほとんど絶え間なく、いらだたしさを押し殺したような気持でいる母が、わたしのただならぬ様子に目をつけて、夜食の時にこう言つた。「……お前は何だつてそうふくれ返つてるんだね、二十日ねずみが挽割り麦をねらつてるんじやあるまいし！」と言うのであつた。わたしは返事の代りに、ほんのお付合いにやりと

笑つてみせて、「……これを見なが知つたらなあ！」と考えた。十一時を打った。わたしは自分の部屋へ引つ込んだが、服は脱がずにいた。わたしは、真夜中を待っていた。やがて、十二時を打った。「……さあ、頃合いだ！」と、わたしは齒と齒の間から押し出すようにささやいて、上着のボタンを上までかけ、御丁寧ていねいに両の袖そでをたくし上げて、庭へ出かけて行つた。（これはまさに「いざ、出陣！」という思いかも知れない。）

二、夜中、庭のある場所で誰かの現われを待つ

わたしはすでに前もつて、見張りの場所を決めていた。わたしたちの屋敷と、隣のザセーキン家の庭を隔てている垣根かきねが、共通の壁に接している庭のはずれに、一本の樅もみの木がぼつんと立っていた。その低く茂しげった枝の下に立っていると、夜の闇やみが許す限り、周囲に起こるすべてのことを残らず見て取ることが出来た。そこには、いつもわたしの目に神秘めかしく映る一本の細道がうねっていた。この細道はうねうねと蛇へびのように垣根かきねの下をはつて（この辺に垣根かきねを踏み越えたらしい足跡が見えていた）、全部アカシヤの木でできた丸い四阿あすまや（壁がなく屋根やねと柱だけの小屋）の方へ通じていた。わたしは樅もみの木まで辿り着くと、その幹みきに身を寄せながら見張りを始めたのである。

それは前夜と同じように、静かな夜だった。けれど、空には雲はずつと少なく――灌木かんぼく（低い木）の茂みばかりでなく、背の高い草花の輪郭まで、かなりはつきりと見分けられた。期待の最初の幾瞬間の悩ましき、ほとんど恐ろしいくらいであった。わたしはもうどんなことでもしかず覚悟が出来ていたけれど、ただどんなふうにしたものか「……どこへ行くのだ？ 待て！ 白状しろ――さもないと殺してしまうぞ」と怒鳴りつけたものか、それとも、ただ一刺しに殺したものと、その点を思いめぐらしていた。一つ一つの物音、一つ一つの葉ずれの響ひびきが、わたしには尋常一様でない、意味ありげなものに感じられた。わたしは身構えをして、前の方へかみ込んだ。けれども、三十分と経ち、一時間と経つうちに、わたしの血はだんだん冷さめて、静まって来た。こんなことをしたって、何にもなりやしない、これは我ながらいささか滑稽こっけいだ、自分はマレーフスキイにからかわれたのだ――と言つたような意識が次第に心へ忍び込んで来た。自分の隠れ家かくがを捨てて、庭をひとまわりした。まるでわざとねらつたように、どこにもかさりという音さえ聞こえなかった。何もかもしんと静まり返つて、家の犬さえ耳門みみかどのそばに丸くなって眠っていた。ジナイーダとの出会いを思い出して、物思いにふけり始めた。（多くの場合、ほとんど諦めあきらめかけていた頃に、何故か突然、何かが起こつたりするものである。）

三、夜中、庭を通り過ぎる父親の姿を目撃する

さて、まさに「決定的瞬間」がやって来た。それを本文で見ると、次のようなものである。つまり、「……ぎいと戸の開く音がして、それから小枝のぼきりと折れる音が、かすかに聞こえたような気がしたのである。わたしはたった二飛びに温室から飛び降りると、じつとその場に立ちすくんだ。軽快な、けれども用心深い足音が、まざまざと庭の中に響ひびいていた。足音がだんだんわたしの方へ近づいて来る。『……来た……いよいよやって来たぞ！』という考えがわたしの胸にひらめいた。わたしは痙攣けいれん的にポケットからナイ

フを取り出し、痙攣的にそれを押し開いた。何か赤い火花のようなものが、わたしの目の中でくるくるまわり出し、恐怖と憎悪に髪の毛がざわざわと動くような思いがした。足音はまっすぐにわたしの方へ進んできた。わたしは身をかがめ、足音のする方へ首を差しのべる……ついに男は姿を現わした……ああ、何ということだろう……それはわたしの父であった」。

彼は黒いマントに全身を包んで、帽子をまぶかにかぶっていたけれど、わたしはとっさに見分けがついた。彼はそつと爪先立ちでそばを通り過ぎた。わたしは何ものにも身を隠していなかっただけれど、ほとんど地面と平行しているかと思われるほど、平たくなって身を縮めていたので、彼はわたしに気がつかなかつたのである。ほとんど殺人を覚悟していた嫉妬に狂うオセロは、突然小さな学校生徒に変わってしまった。(これは大きな存在の父親に対して、まだ十六歳の息子ではどうにもならない)。わたしは思いがけない父の出現にびっくりして、彼がどこから来てどこへ姿を消したのか、初めの間まるで心づかなかつたほどである。あたりが再びしんと静まった時、その時初めてわたしは身を伸ばして、「……何だってお父さんは、夜中庭を歩きまわっているのだろう」と考えた。

わたしは、酔いがさめたような気持になった。とは言え、家へ帰りながら、接骨木の下にある自分のベンチへ立ち寄って、ジナイーダの寝室の窓を見上げた。少し外へ反った小さな窓ガラスは、夜空から落ちる弱々しい光に、ぼうつと青みを帯びていた。すると、不意に……白っぽい巻カーテンがそつと用心深く(音を立てないように)下ろされて、窓仕切りの所まで下りきると、そのままじつと動かなくなったのである。(これは、父親と別れたジナイーダは、自分の部屋へと戻り、そして、窓のカーテンを下におろしたのである。本来であれば、深夜であるので、すでに「寝ているもおかしくない時間帯」にも関わらず、まだ起きていて、しかも、なぜ今このタイミングで、窓のカーテンが下におろされていくのかと不思議に思っているのである。)

「……これは一体何だろう？」と、再び、自分の部屋に立った時、わたしはほとんど無意識に、声を立ててこう言った。「……夢だろうか、偶然だろうか、それとも……」と、忽然としてわたしの頭に浮かんだ想像は、あまりに新しく、あまりに奇怪なものだったので、わたしはそれに思いを留める勇氣さえなかった。(それはもちろん、父親とジナイーダとがまさか「恋仲」にあったとは！ それを素直に認めることは、なかなかでき難かったということである。)

十八、ジナイーダとその実の弟と遊び

さて、この章は、最初に、ジナイーダの「実の弟」(幼年学校の生徒)が出て来るが、これは恐らく、次の章の「夫婦げんか」へといきなり行くのではなく、いわば「クツション」置いた感じになるのだろう。そして、この章で最も大事な文章は、やはり、「……僕はみんな知っています。なぜあなたは僕をおもちゃにしたんです。僕の愛なんかは何のために必要だったのです？」と言うと、「……すみませんでしたわね、ヴォロージャ……」と、ジナイーダは言い出した。「……ああ、ほんとにすいませんでしたわ……」と言って、彼女は両手を握りしめた。「……わたしのからだの中には、何ていやな、暗黒な、罪深い心もちが潜んでいるんでしょう。だけど、今はわたしもあなたをおもちゃにしてはいませ

ん。わたしあなたを愛していますわ——なぜ、どういふふうになってことは、あなた夢にもおわかりにならないでしょうけれど……でもあなたはいったい何を知ってらっしゃるの？」と言うのであった。

さて、最後の言葉の「……わたしあなたを愛していますわ——なぜ、どういふふうになってことは、あなた夢にもおわかりにならないでしょうけれど」とあるが、これは、心から愛している「父親の息子さん」として愛しているということであり、また、例えば、万が一にも「父親とジナイダ」が結婚でもすれば、主人公は二人の「家族の一員」になるので、そのようなことで愛しているということになるのだろう。そして、もう一つ、「……でもあなたはいったい何を知ってらっしゃるの？」と聞いているが、それはもちろん、「父親との関係」であるが、わたしが彼女に何を言うことが出来ただろう？ 彼女はわたしの前に立って、じつとわたしを見つめているではないか。彼女がわたしを見つめるや否や、わたしの頭のでっぺんから足の爪先まで、全部彼女のものとなるのであった。

十九、夫の不倫発覚で夫婦喧嘩が生じる

例の失敗に帰した夜の遠征から一週間のうちに、わたしの心内に生じたことを、詳しく話せと言われたら、わたしは非常な困惑を感じたに違いない。それは奇妙な熱病時代で、極めて矛盾したような思想や疑惑や苦しみなどが、旋風のように渦巻き狂う、一種の混沌界であった。わたしは自分の心の中を覗いて見るのが怖かった。（もし十六歳の子供に、自分の心の中が覗き込めるとすればだが）。たとえ何事にもせよ、はつきりと突き止めるのが怖かった。わたしはただ、手つとり早く一日を晩まで暮らそうと、あせっていた。その代わり、夜はぐっすり眠った。……子供っぽい無分別も、この際だいぶ役に立った。わたしは、自分が人から愛されているかどうか、知ろうともしなかったし、人から愛されていないと、はつきり自認するのも厭だった。わたしは父を避けていたが、ジナイダを避けることは出来なかった。——彼女の前に出ると、まるで火に焼かれるような思いがするのだったが……わたしを燃やし溶かしてゆくその火が、いったいどういう火かということ、別に突き止めたいとも思わなかったのは、ただそうして溶けて燃えてゆくのが、わたしには何とも言えずいい気持だったからである。わたしはありとあらゆる印象に身を任せっぱなしにした。そして自分に対して狡く立ち回って、思い出から目をそむけたり、将来起こりそうに感ぜられるものからも目をつぶったりした。……こうした悩みも、たぶん長くは続かなかつたろうが……不意の事件が落雷のように起こって、一切の結末をつけ、わたしを新しい道へ移してくれたのである。

*

*

ある日のこと、かなり長い散歩を終えて、昼の食事に帰って来ると、驚いたことには、わたしは一人きりで食事をしなければならぬとのことであった。父はどこかへ行ってしまふし、母は気分が悪いから何も食べたくないと行って、寝室に閉じ籠もっていたのだ。わたしは下男たちの顔つきから、何か容易ならぬことが起こったと察した——召使いに根堀り葉堀り聞いて見る勇氣はなかったが、幸い若い食堂係のフィリップという友だちがいて、それは熱心な詩の愛好家で、しかもギターの名人だった。

わたしは彼に尋ねることにした。この男から聞いたところによると、父と母の間には恐

ろしい場面が演じられたのである（それは女中部屋から、一言残らず聞くことが出来た。フランス語も大分使っていたが、小間使いのマーシャは、パリから来た仕立屋の家に五年も住んでいたもので、何もかもすっかり理解出来たのである）。母は父の不実を責め、隣の方でも負けず劣らず、「……どうやら奥様のお年のことで」むごい言葉を投げつけたので、母はわっと泣き出しながら、公爵夫人にやった手形のことを持ち出し、また、夫人のことはばかりでなく、ついでに令嬢の悪口まで並べたのである。その時、父は、何か母に脅し文句を言ったとのことである。

*

*

さて、この章は、「夫婦げんか」がその主要な内容になっているかと思うが、それでは、なぜ「父親とジナイーダの関係」が母親にばれてしまったのかと問えば、それは、「……この騒動の起こりというのは、無名の手紙からでございます。誰が書いたものやら、それは分かりませんが、それさえなければ、こんな事柄が表沙汰になるわけは、少しもありませんでした」と、フィリップはそう言うのであった。それでは、その「……手紙を書いたのはいったい誰かという問題になるかと思うが、それはやがて後に出て来るので、ここでは伏せておきたいと思う。」

そして、もう一つ大事な文章としては、「……わたしは声を放って慟哭もしなければ、絶望に身をゆだねもしなかった。またいつ、どうしてそんなことになったのかと自問してみてもなかった。どうしてもっと早く、ずっと以前にこれを察しなかったのかと、不思議がりもしなかった。——それどころか、父を恨もうとすらしなかった。わたしの知ったこの事実は、とうていわたしの力の及ばないことであつた。この思いがけない発見は、わたしを粉碎してしまつたのである。（つまり、これは、いわゆる「大人の世界的問題」であつて、まだ十六歳の少年などが「立ち入るような問題ではなかった」のである。）

二十、引越してジナイーダとの最後の会話

さて、次の本文では、「……翌日、母は町（モスクワ）へ引越すと言い出した。その朝、父は彼女の寝室に入つて、長いこと二人きりで話していた。父が何を言つたか、誰も聞いたものはないけれど、母はもう泣かなくなつた。母は気持が落ち着いて、食事を持つて来るように命じた」とある。——まず、「……夫は絶えず家庭外の情事をくり返していた。妻は夫を限りなく愛していたので、夫と別れる気はなく、夫も妻の裕福さで好き勝手が出来ているのである」。そこで、妻は、町（モスクワ）へ引越すということで夫を彼女から切り離し、一方、夫は、（まだ若い彼女の将来も考えて）彼女とは別れるという事にしたのかも知れない。

もう一つ、ここで大事な文章は、「……その晩になつて、わたしは驚くべき出来事を目で見る事になつた。父はマレーフスキ伯爵の腕をとつて、広間から控え室へ連れ出し、下男の前で、冷やかにこう言い渡したのである。

「……二、三日前、あなたはある家で、（ジナイーダから）戸口を指して退去を命じられたことがあるでしょう。ところで、今わたしはわざと詳しいわけを話しませんが、これだけのことを申し上げる光栄を有します。——もしあなたが二度とわたしの家へおいでに

なつたら、わたしは窓から放り出しますよ。わたしはあなたの筆蹟が気に入るのです」と言うのであった。つまり、「……無名の手紙を書いたのは一体誰かという問題であるが、それは、マレーフスキイ伯爵はくしやくであったということ」である。

一、ジナイーダはなぜ不倫に身を委ねたのか

さて、町（モスクワ）へ引き揚げる準備が始まった。「……恐らく、父自身も、今さら別荘に残っていたくないらしかつた。しかし、彼は母に頼んで、騒動をもちあげないように、首尾よく母を説きつけたらしかつた。万事は穏やかに、ゆつくりと運んだ」とある。そして、主人公は、「……一刻も早くこんな騒ぎがおしまいになってくれればいいと、そればかり待ち望んでいた」が、ただ一つだけ、主人公の頭にこびりついて離れぬ想念があった。それは、「……あの若い娘が——しかも、とにもかくにも公爵令嬢こうしやくともあるう人が、現にわたしの父が独り身でないことは承知でいながら、また、よしんばあのペロヴゾーフにしる誰にしる、結婚の相手なこと欠かない身でありながら、どうしてあんな思い切つた真似をしたのだろうということであつた。いったい何をあてにしていたのだろう？ みすみす自分の前途を台なしにするのが、どうして怖ろおそしくなかつたのだろう？ そうだ、とわたしは思った、「……これが恋こひなのだ、これが情熱こころというものなのだ、これが身も心も捧げ尽くすということなのだ」と思ったとある。（それは、特に若い時にこそ、まさにそのような「一途な恋」というようなものは数多く生じ易いのかも知れない。）

二、ジナイーダとの最後の会話

ひよいと偶然わたしは、離家はなれの窓の一つに、青白いものがぼつんと浮かんでいるのを目にした。「……あれはジナイーダの顔じゃないかしら」と、わたしはふつと思つたが……果してそれは彼女の顔だつた。わたしは、もう我慢がしきれなかつた。わたしは彼女に最後のさよならも言わずに、このまま別れてしまふに忍びなかつた。わたしは折りをうかつて、離家はなれへ出かけて行つた。

客間に入ると、公爵夫人こうしやくがいつものだらしない、無頓着な挨拶あいさつでわたしを迎えた。「……坊っちゃん、お宅じゃまあどういふわけで、こんなに早く引き上げなさるんですか？」と夫人は言った。わたしは彼女（夫人）の顔つきを見て、ほっと胸が軽くなつた。彼女は何も気がついていない。少なくともわたしには、その時そんな風に見えたのだ。次の間から黒い着物をきて、髪かみの解けかかつたジナイーダが、青ざめた顔を現わした。彼女は無言のまま、わたしの手をとつて、自分の部屋へ連れて行つた。「……わたしはね、あなたの声が聞こえたから、すぐに出て来ましたの。あなたは平気でわたしたちを捨てて行けるのね、意地悪な坊っちゃん！」と言うので、「……公爵令嬢こうしやく、僕はあなたとお別れに来たんです」と、わたしはそう答えるのであつた。

「……恐らく、もう永遠の別れでしょう。あなたもお聞きになつたでしょうが、僕は引き上げるのです」と言うと、ジナイーダは、じつとわたしを見つめた。「……ええ、聞きましたわ。でも、来て下すつてありがとう。わたしはもうお目にかかれまいと思つていましたの。わたしのことを悪く思わないでちょうだい。わたし時々あなたをいじめました

けれど、それでもあなたの思っておられるような、そんな女じゃないことよ」と言い、「……ほんとに、わたしそんな女じゃないのよ。わたしわかっていますわ、あなたがわたしのことを悪く(例えば「淫らな不倫女」と)思ってることぐらいは」と言うので、「……僕が?」「……ええ、あなたよ……あなたよ」と言うので、「……僕が?」と、わたしは悲しげに繰り返した。わたしの胸は前と同様に、打ち勝つことの出来ない、名状しがたい魅力に負けて震え始めた。「……僕が? どうか信じてください。ジナイード・アレクサンドロヴナ、たとえあなたが何をなすっても、どんなに僕をお苦しめになっても、僕は自分の生涯の終わりまで、あなたが何をなすっても、崇拜します」と言うのであった。(これもまさに《若い時ならではの》「一途な恋」ということになるのかも知れない。)

彼女は急にわたしの方へふり向いて、両手を大きく広げ、わたしの頭を抱きしめて、強く熱い接吻をわたしに与えた。その長い長い別れの接吻が、誰を心あてにしたものか、神ならぬ身の知るよしもなかったけれど、わたしはむさぼるように、その甘さを味わった。ただわたしは、もうこれが二度と繰り返されないのを知っていた。そして、彼女はふりきって出て行った。わたしもこの家を辞し去った。この時、胸に抱いた心もちを、わたしは到底伝えるだけの力がない。わたしはそれがまたいつか、二度と繰り返されるのを望みはしないけれど、しかし一度もそれを経験しなかったら、わたしは自分を不幸と感じただろう。——つまり、彼の「はつ恋」というのは、世間一般の主に「性欲を目的とした恋愛」とは全く違って、むしろ「心の底からの相手への純粹な一途な恋心であった」ということであり、それゆえ、まさに「精神的な喜び」というものを深く味わったということである。

三、町で、医師のルーシンに偶然出会う

わたしたちは町へ引越した。わたしは容易に過去を忘れ去ることもできなければ、また急に仕事に手をつけることもできなかった。わたしの痛手はきわめて徐々に癒えていったのである。けれど、当の父に対しては、少しも悪い感情をもっていなかった。それどころか、彼はなんとなくわたしの目に、一段と大きなものに映じたくらいである……: 心理学者はなんとでも好きなように、この矛盾を説明するがいい。

さて、町(モスクワ)へ引越してから、ある日、医師のルーシンに偶然出逢った。彼は、「……君だったんですか! まあ顔を見せてください。やはり相変わらず黄色い顔をしておられるが、それでも目の中には、もとのようなやくざ(無分別)なものが見えなくなりましたね。やっと愛玩用の小犬じゃなくて、一人前の男に見えますよ。いや結構、そこでどうです、勉強していただけますか?」と聞くので、わたしはため息をついた。嘘をついたくなかったし、さりとて本当を言うのは恥ずかしくなかった。「……なに大丈夫」とルーシンは言葉を続けた。「……びくびくすることはありませんよ。肝心なのは、『……しやんとした生活をして何事によらず夢中になり過ぎないことですよ』とある。(この「何事によらず夢中になり過ぎないことですよ」に最大の力点が置かれている)、まったくあんなこと(ばか騒ぎ)をして、何の役に立つものですか? 「……(感情の)波つてやつはどこへ打ち寄せるにしても——ろくな場所へは連れて行ってくれませんよ。人間はたとえ岩の上(しっかりとした環境の上)に立っていたって、やはり支えてくれるのは自分の足(知性や理性)ですからね。どうも咳が出ていかなんですが(体調が少し悪いのかも知れない)」

と言うのであった。

ところで、「……ペロヴゾーロフですが、君、うわさを聞きましたか？」と言うので、「……何ですか？ 聞きませんが」と言うと、「……行方不明になってしまったんです。何でもコーカサスへ行つたとかいう話ですが、君みたいな若い人には全くいい教訓ですよ。要するに、『……潮時しほときを見て引き上げること、そうでないと、網あみを破やぶって抜け出すことが出来なくなるからです』。(彼はジナイーダに夢中になり過ぎてしまった)。まあ、君などは無事にうまく抜け出したようだが、しかし、またひつかからないように気をつけなさい。じゃ、さようなら」と言うのであった。「……引つかかるもんか」とわたしは考えた。「……もう二度とあの人には会わないんだから」と。ところが、わたしはもう一度ジナイーダを見かける運命にあったのである。

二十一、父親と一緒に乗馬で遠乗りをする

父は毎日、馬に乗って出かけていた。乗馬には赤栗毛色くろがげの見事なイギリス産を持つていた。首が細長くて足の長い逸物いりちうぶで、疲れるということ知らぬ、意地の悪い荒馬で、名をエレクトリックと言った。父においては、誰もそれを乗りこなす者がなかった。ある時、彼は、久しくないことに、上機嫌ていの体でわたしの部屋へ入って来た。彼は外出の用意をして、もう拍車はくしゃをつけていた。わたしは、一緒に連れて行ってくれと頼んだ。「……それより馬跳びばいりでもして遊あそんだらいいだろう」と父は答えた。……でないと、お前の痩せ馬はくしゃじゃ、とてもついて来られまいからな」と言うので、「……ついて行かせますよ。僕も拍車はくしゃつけて行くから」と言うと、「……じゃ、まあいいだろう」と言うのであった。

わたしたちは乗り出した。わたしの馬は尨毛むくげの若い黒馬で、足もしっかりしているし、かなり元気もいい方だった。もともと、エレクトリックが早足でいっぱいに走り出すと、わたしの馬は全速力を出さなければならなかったが、それでもとにかく遅れはしなかった。わたしは、父ほどの乗り手を見たことがない。その馬上の姿は実に美しく、無造作なうちにも器用さを見せていたのである。彼を乗せている馬でさえそれを愛して、それを誇りとしているかと思われるほどであった。わたしたちは並木街という並木街を通りつくして、処女原おとめがはらでもしばらく乗りまわし、幾つか垣根かきねも飛び越して(初めわたしは飛ぶのが怖かったが、父は臆病者おそむけを軽蔑けいべつしていたので、わたしも怖がるのをやめた)。モスクワ河を二度も渡った。それでわたしは、もうそろそろ帰るのだろうと思った。ことに当の父が、わたしの馬が疲れたことに心づいて、それを口にしたからである。その時不意に、父はわたしのそばを離れて、クルイムスキイ浅瀬あさせあたりから方向をわきへ転じ、河岸かしづたいにどんどん駆け出した。わたしはそのあとを追って馬を飛ばした。古い丸太を山のように積み上げた所まで来ると、彼は素早くエレクトリックから飛び降りて、わたしにも降りるように言いつけた。そして、自分の馬の手綱たづなをわたしに持たし、しばらくこの丸太のそばで待っているように言いつけると、一人で小さな横丁へ折れ、姿を隠してしまった。

一、二頭の馬を引き連れ、父親の帰りを待った

さて、父親は、「……古い丸太を山のように積み上げた所まで来ると、彼は素早くエレ

クトリックから飛び降りて、わたしにも降りるように言いつけた。そして、自分の馬の手綱たづなをわたしに持たし、しばらくこの丸太のそばで待っているように言いつけると、一人で小さな横丁へ折れ、姿を隠してしまった」とある。そこで、主人公は、仕方なく、二頭の馬を引き連れて、河岸かしをあちこち歩いていたが、父は帰ってこなかった。河の方からはいやな湿気が吹いて小雨こさめが音もなく降り始めて、先ほどからそばを歩きつ戻りつして、すっかり飽き飽きしてしまった灰色の丸太に、(雨が)黒い小紋型の模様をつけた、わたしはものわびしい気持になってきた。父親はいつまでたつても帰らなかった。

そこで、「……わたしは父の立ち去った方角へ五、六歩歩いた。それから横町をはずれまで歩いて、角かどを曲がると、はたと立ち止った。その往來を、ものの四十歩ほど行つた先の所に、木造の小さな家の開け放された窓に向かつて、背中をこちらへ向けながら、父が立っていた。彼が窓仕切りに胸をもたせていると、家の中には、カーテンに半ば隠れながら、黒っぽい服を着た女がすわって、父と話をしていた。この女が、ジナイードだった」とある。——つまり、「二人」(父親とジナイード)は、「完全には別れていなかった」のである。父親は、町(モスクワ)へと引越した後あと、このような「密会」を何度か繰り返していたのか？ それとも今度が最初のことなのか？ 全くわからない。それは、作者(ツルゲーネフ)自身、「二人」がこのように逢っているとは、全く知らなかったのである。

二、そこに父親とジナイードの姿があった

さて、この場面は、ツルゲーネフの『はつ恋』という作品の中なかでも、最も有名な場面であり、それゆえ、一つ一つを丁寧に読み進んでみたいと思うが、それは、次のようことである。まず、本文では、「……わたしは思わず棒立ちになった。正直なところ、そんなことは夢にも思いがけなかったのである」とある。これがまさに「……作者(ツルゲーネフ)自身、『二人』がこのように逢っているとは、全く知らなかった」のである。次に、「……もし父がふり返ったら」とわたしは考えた。「……そしたら、もう万事休すだ」。けれど、不思議な感情が——好奇心よりも強く、嫉妬しつとん心よりも強く、恐怖よりも強い感情が、わたしの足を引き止めたのである。それは一体何かと問えば、それは、まさに「……真実を見極めたいという意識」である。

わたしは、じっと目を据えて、一心に耳を傾けた。「……父は何やら主張しているらしく、ジナイードは承知しない様子である」とある。この極めて短い「描写」だけでも、二人の「立ち位置」ははっきりと見えて来る。つまり、父親は、「……君の将来のためにも別れた方がいい」と説得しているのである。一方、ジナイードは、「……その別れ話にどうしても応じようとしないのである」。だからこそ、「……父親はいつまで経つても帰ってこなかった」のである。

わたしは今でもこの間あいだのこのように、彼女の顔を思い浮かべることができる——悲しげな、まじめな、美しい顔で、言葉に尽くせぬ憂愁と、身も心も献げ尽くしたような愛と、一種の絶望の陰をおびていた——わたしはこれよりほかの言葉を考えつくことができない。彼女はごく言葉みじかに受け応えこたえをして、目さえ上げずただ微笑していたが——それは従順な、しかもかたくなな微笑であった」とある。

つまり、彼女(ジナイード)という人は、心の底から「彼」(父親)のことを愛してい

て、彼の言うことなら何でも受け入れ、身も心も献げ尽くしてもよいと思っていたが、ただ一つ「別れ話」だけはどうしても受け入れることは出来ないという「表情」であり、それをもっと言えば、たとえ「愛人」でも何でも構わない、ただ「別れるのだけは絶対にいや」というような気持ちだったのかも知れない。

父はひよいと肩をすくめて、帽子をかぶり直した。それは、彼がいらいらしてきた時の証拠だった。やがて、「……あなたは別れなくちゃいけません、……」という父の言葉が聞こえた。ジナイーダはきつと身を起こして、片手をさしのべた。……その途端に、わたしの見ている前で、あり得べからざることが起こった。「……父がいきなり、今まで長い上着（フロット）の裾の埃りを払っていた鞭を、さつと振り上げたかと思うと——肘までむき出しになっていたあの白い腕を、ぴしりと打ち据える音がしたのである。わたしは思わず叫び声を立てようとして、あやうく自分を押しさえた。ジナイーダは、びくりと体を震わしたが、無言のままちらと父を見ると、その腕をゆっくり唇へ当てがって、一筋真つ赤になった鞭のあとに接吻した。——これは、「別れ話」以外ならば、すべてを受け入れてもよいという「意志表示」でもあるのである。例えば、鞭でぴしやりとやられたら、とても我慢はなるまい、憤慨せずにはいられまい！ ところが、一旦「……恋に深く落ちた身になる」と、どうやらそれをも受け入れられるものらしい。

それを見た、「……父は、鞭をわきへ放り出して、あわてて玄関の段々を駆けあがると、家の中へとび込んだ」とある。——これは、当然、（心ならずも思わず）ジナイーダの腕に鞭を振るってしまったことに驚いて、あわてて玄関の段々を駆けあがると、家の中へとび込んだのであるが、まず、「……なぜ鞭をわきへ放り出したのか？」と問えば、それは、鞭を持つて入れれば、またその鞭で彼女を叩いてしまう危険性があるからである。次に、そもそも「……父親はなぜ鞭を振るつたのだろうか？」と問えば、それは、「……あなたは別れなくちゃいけません」と何度言い聞かせても、それをどうしても受け入れようとしなないその頑なで「途さの上」に、なおも手を差し伸べてきたので、「……えーい、聞き分けのない女だ！」と苛立って、思わず鞭を彼女の白い腕の上に振るってしまったのである。

それは、女の「途な愛」の凄まじさ、その秘めた情念の底知れぬ烈しき、それらに「圧倒されてしまった」のである。（それゆえ、たとえ何度鞭で叩いても、恐らく、彼女は「自分の意志」を変えないだろう）。そこで、鞭をわきへ放り出して、あわてて玄関の段々を駆けあがると、家の中へとび込んだのである。（むろん彼女を心配しての事でもあるが）——（後述）、父親は、息子（主人公）に次のような言葉を残している。「……女の愛を恐れよ。この幸福を、この毒を恐れよ……」と。それは、「……途な愛に溺れ、堕ちて行けば、（藻掻いても藻掻いても抜け出せぬ）「底なし沼」に深く嵌まってしまい、最悪、まさに「……人生を踏み外し、生命を落とす」ことにもなりかねない。だからこそ、「……女の愛を恐れよ。この幸福を、この毒を恐れよ……」となるのである。

一方、「……ジナイーダは後ろを振り返ると、さつと両手をひろげ、顔をのけざらせて、やはり窓から消えてしまった」とある。これは、あわてて走り寄って来た父親（恋人）を見ては、まさに「無条件で恋人を受け入れようとしている姿」になっているのである。

驚きのあまり気が遠くなって、恐ろしい疑惑に胸を締めつけられながら、わたしはもと来た方へ駆け出して、危うくエレクトリックを放しそうにしながら、横町を走り抜けて河岸へもどった。わたしは何一つ考え合わすことも出来なかった。わたしは冷静で自制力の強

い父が、時々発作的な狂暴さを見せることは知っていたが、それにしても今しがた見た光景は、何としても合点がゆかなかった。——とは言え、わたしは同時にまた、この先自分がどれほど生きるにせよ、ジナイーダのあの身の動き、あの眼差し、あの微笑を忘れることは、永久に不可能なことである。彼女の姿——思いがけなくわたしの目に映ったあの新しい姿は、永遠にわたしの記憶に刻み込まれたのである。(それは、いわば「女の愛の究極の形の一つ」を観たのである)。意味もなく河を見つめながら、涙が滾々と流れ出るのに気づかなかつた。彼女が打たれる——とわたしは考えた——打たれる——打たれる」とわたしは考えるのであつた。

三、家への帰り道とその後、色々な思いや考えが思い浮かんだ

さて、「……おいどうした——馬をおよこし！」という父の声が背後に響いた。わたしは、機械的に手綱を父に渡した。彼はひらりとエレクトリックに飛び乗った。凍えきつた馬はいきなり後脚で突つ立って、二間ばかり前へはねた。……だが父は、すぐにそれをとり静めた。彼は馬のわき腹へ拍車をぐつとあて、首筋をこぶしで殴りつけた。「……ええつ、鞭がない」と彼はつぶやいた。

わたしは、ついさっきの風を切る唸りと、その鞭がびしりと鳴った音を思い出して、おもわず震え上がった。「……一体どこへやっただんですか？」と、しばらく経ってからわたしは聞いた。父はそれに答えもせず、どんどん前へ駆け出した。わたしはあとから追いつたろう？」と彼は歯の間から押し出すように言った。(これはもしかしたら息子に見られたかも知れないと思つたかも知れない。(わたしは)「……ええ、少し。一体どこへ鞭を落したんです？」とわたしはもう一度聞いた。(これは、なぜ「鞭を放り出したのか?」、その「真意」がぜひとも知りたかつたに違いない)。「……落とさやしない」と彼は言った。「……捨てたんだ」と彼は急に考え込んで、うなだれた。……わたしはその時初めて(そしてほとんど最後に)、父のきびしい顔だちがどれほどの優しさと同情の思いを、表わすことができるかを見たのである。——つまり、主人公は、次のように解釈したのである。「……父親は、手に鞭を持っていたら、再び、ジナイーダを鞭で叩いてしまうかも知れない。そうならないために、父親は鞭を投げ捨てた」のだと。そこに「……父のきびしい顔だちがどれほどの優しさと同情の思いを、表わすことができるかを見た」のである。父は再び馬を飛ばし始め、それからもう追いつくことが出来なかつた。わたしは十五分ばかり遅れて家に帰りついた。「……これが恋なのだ！」と、すでにノートや参考書の現われ始めた書物卓の前にすわりながら、その夜わたしはまたもやひとりごちた(独り言を口にした)。「……これが愛欲というものだ!……それはだれからであるうとも……たとえ愛する人の手であろうと、あのような鞭を受けながら、憤りを感じずにはいられそうもないが、しかし恋している身になれば、それが出来るものと見える。(つまり鞭でびしやりとやられたら、とても我慢はなるまい、憤慨せずにはいられまい! ところが、一旦恋に深く落ちた身になると、どうやらそれをも受け入れられるものらしい。主人公は今までそれを知らなかつたということになるのだらう)。

最近の一か月は、すっかりわたしを労成させてしまった。そして、「……自分の恋も、

それに伴ういろいろな興奮や悩みも、いま新たに出現した未知の何ものかの前へ出すと、我ながらひどく小っぼけな、子供じみた、みすぼらしいものに見えた」とある。例えば、大人になつて誰もが羨むような「大恋愛」などをすれば、子供の頃の「はつ恋」などは、「……我ながらひどく小っぼけな、子供じみた、みすぼらしいものに見えて来る」ものである。ところが、作者（ツルゲーネフ）の場合は、そうではなかったのである。

とは言え、その未知の何ものかの正体は、わたしにはほとんど推察することが出来なかった。それはただ、自分が一生懸命薄闇の中で見きわめようと空しい努力をしている、見知らぬ、美しい、しかも物凄顔のように、わたしを脅えさせるだけであつた。

ちようどその夜、わたしは奇妙な恐ろしい夢をみた。わたしは低い暗い部屋へ入つたような気がした。すると、父が手に鞭を持って立ちながら、足を踏み鳴らしていた。隅の方には、ジナイーダが身を縮めていたが、その腕でなく額の上に、赤いものが一筋ついているのだ。（これは父親がジナイーダを鞭打っている）。……すると、二人のうしろから、全身血みどろなペロヴゾーロフが起き上がつて、青白い唇を開きながら、ものすごい顔をして父を威嚇している。（これは愛するジナイーダが鞭打たれているのを見て、激怒して、ものすごい顔をして父を威嚇しているのである。）

四、ふた月後の大学入学と半年後の父親の急死

さて、ふた月のあとわたしは大学へ入つた。それから半年経つて、父はペテルブルグで（脳卒中のために）急死した。それは、母とわたしを引き連れてこの町に引き移つた当座のことであつた。（これはモスクワからバルト海の最重要「港湾都市」のペテルブルグへ転居してから半年後）。死ぬ四、五日前に、父はモスクワから一通の手紙を受け取つたが、それを見て父は非常に興奮した模様であつた……彼は母のところへ行つて、何か頼んだ。そして話によると、涙まで流して泣いたそうである。それが彼なのである。わたしの父なのである。発作の起こる当日の朝、彼はわたしに宛てて、フランス語の手紙を書き始めていた。「わが子よ」と彼は書いていた。「……女の愛を恐れよ。この幸福を、この毒を恐れよ……」とあるが、これは、「……一途な愛に溺れ、堕ちて行けば、（藻掻いても藻掻いても抜け出せぬ）「底なし沼」に深く嵌まつてしまい、最悪、まさに「……人生を踏み外し、生命を落とす」ことにもなりかねない。だからこそ、父親は何度も「情事」（浮気）を繰り返しながらも、しかし、いわゆる「深入りすることは避けて来た」のである。

母は、「……彼の死後、かなりまとまつた金額をモスクワへ送つた」とある。これは、「……死ぬ四、五日前に、父はモスクワから一通の手紙を受け取つたが、それを見て父は非常に興奮した模様であつた……彼は母のところへ行つて、何か頼んだ。そして話によると、涙まで流して泣いたそうである」。そのような「夫の心からの嘆願」を汲んで、母親は、モスクワに居る「公爵夫人とその令嬢（ジナイーダ）」の所へ「かなりまとまつた金額」を送つたのである。

二十二、令嬢ジナイーダのその後とその死

四年ばかり過ぎた。わたしは大学を出たばかりで、何を始めたらいいいのか、いかなる扉

をたたいたものやら、まだよく見きわめがつかなかった。そこで、当分の間なすこともなくのらくらしていた。ある晩のこと、わたしは劇場で詩人のマイダーノフに出会った。

さて、最後の章であるが、それは、四年後、劇場で「詩人のマイダーノフ」に偶然出会い、彼から「公爵令嬢ジナイダ」の消息を知ることになるのである。それを本文で見ると、「……ある晩のこと、わたしは劇場で詩人のマイダーノフに出会った。彼はすでに結婚して、勤めについていたが、別に変わったところも見い出せなかった。彼は相変わらず必要もないのに感激しては、すぐにまた悄気返しよげかえったりした。「……君、知っていますか？」と、話のついでに彼は言った。「……ドリスカヤ夫人がここにいるんですよ」と言うので、「……ドリスカヤ夫人つて、誰のことですか？」と聞くと、「……君はもう忘れたんですか？ もとのザセーモナ公爵令嬢こうしやくですよ。ほら、われわれ一同が恋をしていた。君もやはりそのお仲間でしたっけね。覚えておいででしょう。あのネスクーチヌイ公園のそばの別荘で、ね？」と言うのであった。「……あの人がドリスキイと結婚したんですか？」「そうです」「……で、あの人がここにいるんですか、この劇場に？」と聞くと、「……いや、ペテルブルグにいるんです。つい四、五日前に来たばかりなんです。何でも外国へ行くそうで」と言う。「……ご主人はどんな人ですか？」とわたしは尋ねた。「……なに、なかなか立派な話せる男で、財産もあります。僕とはモスクワ時代（役所）の同僚ですよ。君も御承知の——例の一件以来……あの事は多分よく御承知のはずだと思いますが……（マイダーノフは、意味ありげに微笑して）あの人は配偶を求めるのが、なかなか容易じゃなかったんですよ。いろいろあとを引く問題もありましたからね。しかし、あの利口な人のことだから、どんなことだって不可能なはずはありません。まあ、行つてごらんなさい。君ならきつと歓迎するでしょう。あの人はまた一層綺麗いっせうになりましたよ」と言うのであった。

*

*

さて、ここで気になるのは、公爵令嬢ジナイダの「結婚」のことであり、例えば、「……死ぬ四、五日前に、父はモスクワから一通の手紙を受け取ったが、それを見て父は非常に興奮した模様であった……彼は母のところへ行つて、何か頼んだ。そして話によると、涙まで流して泣いたそうである」とある。——では、この時の「手紙の内容」は一体どのようなものであったのか？ 恐らく、作者（ツルゲーネフ）自身もよくは知らないのかも知れない。それゆえ、何の記述もないが、恐らく「金銭的な問題」が主かと思うが、それゆえ、モスクワに居る「公爵夫人とその令嬢（ジナイダ）」の所へ「かなりまとまった金額」を送ったのである。だとすれば、「……父親が生きている間は、ジナイダは独身であり、父の死後、四年間のどこかで結婚したことになる」かと思う。

次に、彼女の「結婚相手」であるが、それは、次のように記されている。「……なに、なかなか立派な話せる男で、財産もあります。僕とはモスクワ時代（役所）の同僚ですよ。君も御承知の——例の一件以来……あの事は多分よく御承知のはずだと思いますが……（マイダーノフは、意味ありげに微笑して）あの人は配偶を求めるのが、なかなか容易じゃなかったんですよ。いろいろあとを引く問題（金銭問題その他等）もありましたからね。しかし、あの利口な人のことだから、どんなことだって不可能なはずはありません。まあ、行つてごらんなさい。君ならきつと歓迎するでしょう。あの人はまた一層綺麗いっせうになりましたよ」と言うのであった。——だとすれば、詩人のマイダーノフという人は、ジナイダ

とのいわば「親交関係」はずっと続いていて、それゆえ、彼女のこの「四年間の様子」についてもかなり詳しいところまでよく知っていたのかも知れない。

*

*

そして、マイダーノフはわたしにジナイーダの住所を教えてくださいました。彼女は「デムート」というホテルに滞在していたのである。古い思い出が、わたしの心の中でうごめき始めた。……わたしは翌日すぐにも元の「恋人」を尋ねようと心に誓った。ところが、何かと用事ができて、一週間、二週間と経ってしまったとある。

しかし、これはおかしいのである。なぜなら、「……わたしは大学を出たばかりで、何を始めたらいいいのか、いかなる扉をたたいたものやら、まだよく見きわめがつかなかった。そこで、当分の間なすこともなくのらくらしていた」のである。そのような若者が、「……何かと用事ができて、一週間、二週間と経ってしまった」などは、あり得ないことである。つまり、主人公の「心の中」には、「……彼女にぜひとも会いたいという気持ちと、もう一方、彼女に会うことをためらう気持ちの両方があったということである。それは一体なぜなのか？ 恐らく、四年間の間に、結婚をして妊娠までしている彼女の「変わってしまった姿」を見ることにためらいが生じたのかも知れない。——そして、ようやくわたしが「デムート」へ出かけて、ドーリスカヤ夫人を尋ねた時——彼女は四日前に思いがけなく、産のために死んだという報知を聞かされたのである。（この産のために死んだ理由に、彼女の持病の影響も少しはあったのかどうかは全く分からない。）

わたしは、何だか心臓の中でどきりとしたような気がした。自分は彼女に会うことが出来たのに、とうとう会わないでしまった。そして、もはや永遠に見ることが出来ないのだと思うと——この悲痛な思いが否み難い激しい非難となって、わたしの心に食い入ったのである。死んでしまった！——鈍い目つきで玄関番を見つめながら、わたしはこう繰り返した。それから静かに往來へ出て、どこへともなく歩き出した。過去のすべてが一時に浮かび出て、わたしの目の前に立ち現われた。「……あの若々しい熱烈な光り輝く生命は、こういうふうに解決せられたのか？ ああして急いで興奮しながら、突進して行った生命の目的は、こんなところにあつたのか？ わたしはそう考えながら、あの貴い面影、あの目、あの髪の毛が、湿っぽい地下の闇に埋められて、狭い箱の中に収められているところを想像した」とある。

例えば、前に母親が、「……ねえドクトル、この子を叱ってやって下さいな。一日じゅう、氷水ばかり飲んでいるんですよ。それが体にいいことでしょうかねえ、あんな弱い胸をしている癖に」と言うので、「……なぜそんなことをなさるんです？」と医師のルーシンが尋ねると、「……そうしたら一体どうなるんですの？」と聞き返すので、「……どうなるかですって？ 風邪をひいて死ぬかも知れませんよ」と言うと、「……ほんとう？ まあ？ でも、かまやしない——それでけっこうだわ！」と言うので、「……おやおや！」と医師はつぶやき、公爵夫人は出て行ってしまったという場面があつたかと思う。

そして、「……まだこうして生きているわたしから、そう遠くない場所なのである。（これはジナイーダの墓の場所になるのだろう）。そしてひよつとすると、わたしの父のいる場所（墓場）から、幾足（何歩）も離れていないかも知れない……わたしはそんなことを考えながら、想像を緊張させていた。——だとすれば、二人は、同じペテルブルグ地区の同じ墓地に埋葬されていることになるのかも知れない。

心なき人の口より、はからず聞きぬ死の知らせ、
しかしてわれも心なく、その声に耳かたむけぬ。
という一句が、わたしの胸に響いた。

ああ、青春よ！ 青春よ！ お前はどんなことにもかかずらわれない。お前は宇宙（この世）のあらゆる宝を領有（一人占め）しているかのようだ。憂愁さえもお前を慰め、悲哀すらもお前には似つかわしい。お前は大胆で自負に富んでいる。「……われひとり行く——見よや人々！（まあ見ているがいい！）」などと言うけれど、（現実）その言葉の端から、お前の日々はかけり去って、やがて跡かたもなく消え失せる。すると、お前の有する一切のものは、日に照らされる蠟のごとく、また、雪のごとくに消えてゆく……恐らく、お前の有する魅力（青春の魅力）の秘密は、一切を成しうる可能に存するのではなく、一切をなしうる和思考の可能の中に潜んでいるのかも知れない。ありあまる力を、ほかにどうにも使えないので、ただ風のまにまに吹き散らしてしまうところに、あるのかも知れない。われわれの一人一人が真剣に心の底から、「……ああ、もし無駄に時を浪費さえしなかったら、いかなる事を成し遂げたらう！」と、言う得る権利があると信じているところに、（青春の魅力）はあるのかも知れない。

わたしもその通りであった。……ただ一瞬のあいだ浮かび出た初恋の幻、ただ一片のため息と、ただ一抹のもののうい感触によって、ようやく見送ったか見送らないかというあの頃は、わたしは何という希望に満ちていただろう！ 何といるいなことを期待したことであろう？ 何という豊かな未来を、心に描いていたことだろうか？

しかし、わたしの望んだあらゆるものの中で、いったい何が実現しただろうか？ 今、わたしの人生に夕影が射し始めた時となってみると、あの春の暁にあわただしく過ぎ去った雷雨の思い出ほどに、さわやかな貴い何ものが、はたして残っているだろうか？（これらは、誰もが一度は通る「青春という若々しい季節」の「特徴と特性」とを作者みずからの経験を通して総括していることになるのだろう。）

*

*

だが、わたしはいささか自分につらく当り過ぎているようだ。その頃——つまりあの無分別な青春の頃にも、わたしは、自分に呼びかける悲しい声や、墓の中から伝わってくる荘厳な響きに対しても、あながち耳をふさいでいたわけではない。忘れもしないが、ジナイーダの死を知った日から四、五日して、わたしは自分でどうしてもそうせずにはいられなくなつて、わたしたちと一つ屋根の下に住んでいたある貧しい老婆の臨終に立ち会つたのである。ぼろに身を包み、堅い板の上に袋を枕とした彼女は、苦しみ悩みながら息を引き取つた。彼女の一生は、その日その日の乏しい暮しに、あくせく追われ通しで過ぎたのだ。喜びというものをついぞ知らず、幸福の甘い味わいも知らない彼女としては、まさに死こそ——そのもたらす自由、そのもたらす憩いこそ、喜び迎えるべきではなかつたらうか？ ところが、彼女の老ぼれた肉体が抵抗しうる限り、彼女を搾めつける氷のような手の下で、その胸が悩ましい呼吸をし続ける限り、最後の力がいよいよ彼女を見捨てるまで——老婆はひっきりなしに十字を切り続けて、「……主よ、わが罪を許したまえ」とささやき続けるのであった。——そして、ようやく最後の意識のひらめきが消えると同時に、臨終に対する恐怖や怯えの色が、やっと消えたのである。わたしは今でも覚えているが、この貧しい老婆の最後の床に付き添いながら、わたしは思わずジナイーダの身になって、

そら恐ろしくなってきた。(これは、死んで行く身の「心のつらさ」とそれを見守る人の「心のつらさ」と、どちらも大変な思いに襲われているのである)。それを思えば、わたしは、この老婆をはじめ、ジナイダのためにも、父のためにも、そしてまた、自分のためにも、しみじみ祈りたくなった(祈らずにはいられなくなった)のである。(完)

*

*

さて、この最後の「まとめ」部分であるが、例えば、老婆の死をはじめ、父の死やジナイダの死、その他、今は生きている主人公も、やがては死んでいく定めである。つまり、「……人はこの世に生まれ、生きて、やがては死んでいく運命であり、何人もそれを避けることはでき得ない。たとえこの世で他人よりも少しばかりいい思いをしたからとて、それがどれほどのことになるのだろうか。歳月の流れは、それらすべてを永遠の暗闇へと呑み込んでしまうものである。とは言え、一方では、この世に何十年かは生きる事ができ得ることともまた事実である」。それゆえ、われわれ一人一人に出来ることは、一日一日を自分なりに納得して大事に生きることである。特に若い時には、誰でも、多かれ少なかれ、経験することであるが、何をどうしてよいかよく分からず、どうしてもあれこれ無為に過ごしてしまう時期でもあるが、しかし、その人の「心の中」では、必ず、何かを求めているものであり、それでは、その「何か」とは、一体、何かと敢えて問えば、それは、その「人の心」を、うそ偽りなく、真に「深く満たしてくれるもの」であり、それゆえ、「……自分の心が知らず識らずのうちに探し求めていたものは、まさにこれなのだというものにめぐり逢うことこそが大事であり、それが、例えば、仕事であれば、その人にとってのまさに「天職」ともなり得るものである。

前に、作者自身が、「……その未知の何ものかの正体は、わたしにはほとんど推察することが出来なかった。それはただ、自分が一生懸命薄闇の中で見きわめようと空しい努力をしている、見知らぬ、美しい、しかも物凄い顔のように、わたしを脅えさせるだけであった」とあるが、それがまさに「……自分の心が知らず識らずのうちに探し求めていたものは、まさにこれなのだというものであり、それにめぐり逢うことこそが、われわれ人間にとって最も大事なことで共に、最も幸せなことでもあるのである。例えば、ツルゲーネフにとっては、それは、まさに「ものを考えものを書くこと」(つまり「作家」ということであつたのだろう。(完)

*

*

「参考文献」

- ※底本 「はつ恋」 神西清訳（「青空文庫」）
- ※底本 「初恋」 米川正夫訳（「岩波文庫」）